わが愛する歌　―名歌鑑賞―

庄司久恵

他界より眺めてあらば静かなる的となるべきゆふぐれの水

葛原　妙子

『朱霊』所収。美しい歌である。不思議な妖しさと、知性的な詩情に魅せられる歌である。葛原妙子の歌は読むたびに、あらたな呼吸をする。ただ一つの見方ではない。読む時の思念によって、言葉が世界を創る。歌に巾があり、深い思索と夢もある。これが葛原短歌の魅力ではなかろうか。

「他界」とは、葛原の想像する詩的世界であり、この膨らみが、彼女の言語世界である。「的となるべき」の「べき」には、覚悟・決心というような感がある。他界という、今までにない処へ行った気持の表現なのだろう。「しづかなる的」がそれを語っている。宗教的・哲学的の思いは、それを言語化し、始めて分明になり葛原短歌となる。「ゆふぐれの水」も「しづかなる的」も具体的に感覚化してゆく他はない。わたしは「ゆふぐれの水」を永遠の命に繋がるものとして感じている。

生前に葛原妙子は私と同じく大田区在住であり、太陽の舟短歌会大田支部のある「山王」の葛原外科医院長夫人であった。大田区短歌連盟の会長であり、一度お会いしたかったと残念である。近くの洗足池の畔を今日の夕ぐれは、心満たされ、安らかに只歩きたいと願っている。

巻頭言

「三百号記念号に寄せて」

雑誌「太陽の舟」がとうとう三百号の記念号を出すに到った。昭和五十二年十月、伊那谷で阿部先生の第一歌碑除幕式のあった夜、岸田君が歌誌発行の思いを熱く語った。その当時私は短歌より熱い思いを抱くものがあったのでその参加に加わる事は無かった。しかし昭和五十三年十月、第三号で支部発足が図られ、私も一支部に名を連ねる事となった。初めて歌を出したのは、昭和五十三年十二月の父の死で悲しむ私に阿部先生はやさしく作歌を勧めて下さったからである。それが始まりだった。以来雑誌「太陽の舟」は長い創刊準備の時を持つに到る。それは十年、五十五冊に及ぶ。この長さはある意味短歌結社を持つ事への阿部先生の逡巡の長さでもあったろう。先生は「これ程長く、これ程多くの創刊準備号を出した結社は空前にして絶後だ」とよくおっしゃった。そして、昭和六十三年一月一日、満を持して創刊号として第五十六号は発行された。阿部先生の「創刊宣言」を全文掲載する。私達の太陽の舟短歌会の新たなる出発の宣言であるからだ。これからも決して変わる事の無い太陽の舟の支柱である。

「創立宣言」夜の舟から昼の舟へ　　**阿部　正路**

今、私たちは、高々と帆をあげて出発する。さらば、創刊準備号。

太陽の舟短歌会を結んだのは、昭和五十二年の秋。そして、最初の創刊準備号が発行されたのは、昭和五十三年の六月。以来、確実に隔月刊を守って十年、五十五冊を重ねて創刊への基礎を固めた。

私たちは、長い間、胎内に在った。そして今、私たちは、新しく生まれた。折から、エジプトのクフ王の大ピラミッドの西端で〈太陽の舟〉が発見された。ピラミッドの南面の東端で全長約四十メートルの太陽の舟が発見されたのは一九五四年。かくして、対をなす二隻の太陽の舟が確認されている。

太陽の舟は、太陽神を運ぶ。東から西へ。日の出から日没まで空をゆく〈昼の舟〉。そして、地下の世界を西から東へ移動する〈夜の舟〉。二つの舟は一つになって無限循環の世界をとどまる事なく行く。今私たちは蘇生し、昼の舟を漕ぐ。力をこめて、悠久の世界に立ち向かい、決して屈しないと誓う。

こうして私達太陽の舟は悠久の世界に立ち向かいながらついに三百号の発行に到った。多くの先駆者達を失なった。青翔短歌会と融合し、雑誌「ナイル」を発行、再び分かれて「太陽の舟」に戻った歴史をも持つ。人の一生と同様に太陽の舟も多くの紆余曲折があった。そして今がある。その事を何よりも大切に、私達は悠久の世界に立ち向かい、決して屈しない。何よりも真に感動にあたいする歌を作るために。（髙﨑）

太陽の舟　目　次

三十一巵　十二月号（通巵三〇〇号）

我が愛する歌　―名歌鑑賞―　庄司　久恵

巻頭言　三百号に寄せて……高﨑　邦彦……1

二十五首詠　「縣居の森」……三木　勝……4

阿部正路論（第九十八回）……須藤　宏明……6

歌誌散見（第七十四回）……豊泉　豪……7

作品Ⅰ……8

上田やい子・江面伸子・遠藤剛・岡崎くに・岡部千代松・大橋俊弘・緒方善丸・奥田清・尾上貴子・梶川喜與志・河口礼子・川村貴美・北川昭・木村恵子・木村重夫・木村百合子・工藤和子・小貫昭・込山千代・近藤リイ・佐伯朋子・酒向一次・佐田孝義・久保田昭江・久保田美智子・熊谷香織・黒羽紘子・小林絢子・河野静子・塩田秋子・志賀倭子・庄司久恵・末次房江・鈴木美智子・鈴木熹子・杉山榮子・杉山直子・杉本和子・菅谷孝子・善波一江・外筬よし枝・高橋和子・髙﨑邦彦・多久和玲子・武田節子・谷川ひさ・玉川愛子・塚本正子・照山好子・栂野蕗・土橋茂徳・冨永道子・吉田昌夫

十月批評（作品Ⅰ）……山名　恒子……18

（作品Ⅱ）……岡部千代松……19

合　評（座談会）……20

選者十首……岩橋千代子・武田　節子……22

森本　元昭・上田やい子……23

秀歌抜芳（二九八号）……髙﨑　邦彦……24

作　品　Ⅱ……28
豊島英明・中村陽子・長須正文・永野昌子・二反田實・二宮裕子・野村富久子・原武寿子・原田寛・土方澄江・深谷幸子・深谷充代・福地啓子・松岡三夫・松本啓子・松木昭子・丸山孝一郎・三木勝・宮井富美・宮島マツヱ・宮原喜美子・村田一江・村田孝子・森五貴雄・森田勝昭・森本元昭・諸幸子・八代陽子・山田紀子・山田田鶴子・山本賀子・山田玲子・山名恒子・湯本いと・吉岡悠紀子・富原澄枝・よしだゆきお・吉田律子・渡辺幸子・相羽照代・浅見時子・渥美崇子・飯塚裕子・生稲進・石塚立子・伊藤英一・伊藤モト・井上萬里子・今井芳枝・岩橋千代子
長歌特集・五人集……北川　昭・末次房江・角田順子・松岡三夫・三木　勝……36
文法講座・文語で短歌を詠む人のために（十二）……奥田　清……38
歌帖余白（七十二）―編集雑記―……松岡　三夫……39
作歌の目・作歌の技法（第五十九回）……三木　勝……40
歌会報告……42
創立三〇周年記念・三〇〇号記念　平成二十二年新年会のご案内……44
平成二十二年太陽の舟執筆者年間計画併せて原稿依頼……44
特集　３００号に寄せて……45
須藤宏明・奥田清・三木勝・豊泉豪・浅見時子・生稲進・岩橋千代子・川村貴美・熊谷香織・久保田昭江・志賀倭子・庄司久恵・末次房江・多久和玲子・玉川愛子・月田藤枝・土屋道子・照山好子・豊島英明・富永道子・長須正文・深谷充代・松本啓子・宮原喜美子・山田紀子・山名恒子・吉田昌夫
太陽の舟年表……松岡　三夫・山田　紀子……63
編集後記　山田（紀）・松岡
題字……阿部正路
表紙……イラスト阿部正冬

縣居（あがたゐ）の杜

三木　勝

なにげなく降り立ちし街浜松の街を歩みて縣居の杜
鬱蒼と木立を残し鎮もれる縣居の杜坂の上なる
崩壊の危険をはらむ縣居の坂上り行く真淵を尋ね
急なせる坂をあへぎて上りゆく真淵を尋ね坂にあへぎて
坂の上繁れる杜を仰ぎ見て真淵の館吾（あ）れに迫れる
いにしへの人の築きし学の道坂を上りつ吾れは息つく
かくなるも急なる坂と知らずして吾れは訪ねき真淵の館
縣居の神社の鳥居ささやかに参道守る縣居の杜
わづかなる参道曲がり曲がり着く縣居の杜神の館に
鎮もれる神の館を鎮めゐる縣居の杜神の館を

縣居の杜を訪ねて神の家吾れは歩めり真淵の杜を
いにしへの学を求めし人びとの思ひを鎮め縣居の杜
訪ね来て吾れはひとりし歩みゐる真淵の杜のしづけさの径
さびしさに耐へて歩みし学の道真淵と語る杜のしづけさ
正路はいまはいづこを歩みゐる師をなくせしはひとりし歩む
短かる参道ひとり踏みしめて正路おもひ真淵をおもふ
白亜なる真淵の館記念館休館なれば門(かど)を閉ざせる
閉ざしゐる真淵の館記念館秋日をしづめ門を閉ざして
記念館ひとりたたずむ門口に訪ねし人はひとりなる日に
社務所前とほりひとりで帰り行く縣居の杜真淵の杜を
杜を出て下る坂道頂に立てば老婆の喘ぎ上りく
止まりつつ止まりつつして上り来る老婆は坂に喘ぎ上りき
目の合ひてえらい坂だと吾れ言へばほんとにまあと老婆ほほゑむ
坂の上浜松の街見渡せば叡智集めしまぼろしの街
浜松の叡智を築き栄えゐる学のみなもと縣居の杜

阿部正路論（第九十八回）

阿部正路論

須藤宏明

―ダイアローグとしての老年の文学―

阿部正路は短歌の特質を、『和歌文学発生史論』（楓桜社・昭和五十二年・二六五頁）で、

歌は、境涯の文学であり、老年の文学である。

と述べる。簡潔な定義である。その説明として、

斎藤茂吉にしても釈迢空にしても、そして窪田空穂にしても、その最晩年の歌境はいずれもみごとである。むしろ、その至り得た世界は、処女歌集の世界にもまして、深い銀の輝きがある。

と解説している。では、具体的にどのような歌が、どのような「深い銀の輝き」を放っているのか。一例として、阿部の釈迢空の歌に対する言説から、それを考える。阿部は、迢空の『倭をぐな』の「上野動物園」の一連の中から、

いとまありて身は若かりき。時に来て見し　熊　獅子も、死にかはりたり

との歌をあげ、

過去となってしまった若さと、今は既に死にかわった猛獣たちを歌って自らの老いをきわだてている。これもまた、釈迢空の人生の告白の真実である。（前掲・三一二頁）

と読解している。阿部は、「深い銀の輝き」を「死にかはりたり」という表現に見ているのである。死に変わる、とは生命を見通した思考、歌境と考えるべきだろう。生まれ変わりではないのである。若い時に見た熊やライオンは死んでしまっているが、今の現前の熊に連続しているという思いである。生まれることが連続の鎖ではなく、死が鎖となっている。つまり、死は未来への連結点だという思惟である。これが、老年の文学としての歌境に因る「銀の輝き」の表現ではないだろうか。老年の文学とは、単なる嘆きの文学という意味ではなく、深い洞察の文学だということを、阿部は説いているのである。

更に、阿部のこの読解で重要なのは「人生の告白」の「告白」という言葉である。この告白は、独り言としてのモノローグではなく、対話すなわち他者との交通を前提にしたダイアローグとして考えるべきだ。なぜなら、阿部が近代短歌の特徴を、

モノローグからダイアローグへ。これが近代短歌史の必然的な展開の姿だった。（『短歌史』楓桜社・昭和五十六年・三十四頁）

と力説しているように、近代短歌は、独り言であっては短歌としての価値を有しないからである。常に他者を意識した「告白」でなければならない。老いの嘆きというモノローグではない、他者を意識したダイアローグとしての表現、それが老年の文学としての歌境だと、阿部は説いている。

歌誌散見 第七十四回

豊泉　豪

「韻」①

「韻」は二〇〇七年三月、東京で創刊された同人誌である。季刊の発行で、〇九年九月に十一号が出されている。発行人の崎井貫、編集責任者の村岡嘉子、編集メンバーの丹治久恵らは、「韻」を創刊する前はいずれも石本隆一の「氷原」（前田夕暮、香川進系）の主要同人であったが、「韻」として師系や系統はうたっていない。創刊号の後記にある「自由に意見を交わし合う場となる」（村岡）、「ことさらな主義主張の船出ではないけれど同人それぞれが自由な発想・発表の場を」（丹治）、「みなが船頭」（崎井）といったことばから、同人誌としてのこの歌誌の方向性を読み取ることができるだろう。

創刊号の同人一覧には二〇人が名を連ねており、十一号の出詠者は二三人となっている。一人二〇首を基本に三〇首、五〇首の出詠も少なくない。エッセイも四編から、多い号では七、八編が掲載され、そのうち前田夕暮の作品や周辺を取りあげた村岡の「夕暮風韻」は、創刊号から連載が続いている。歌論では崎井の「上田三四二小論」、村岡の「近代短歌の中の埋もれた女性歌人たち」の連載がやはり創刊号から続く。崎井は自身が上田と同じ医師であることを生かして、上田の作品と人物に迫っている。また、村岡は矢沢孝子、武山英子、青木穠子、狭山信乃、川端千枝、原田琴子、斎賀琴、望月麗、川上小夜子と、まさに「埋もれた女性歌人たち」を取りあげ、論じている。貴重な仕事であろう。また、会則に「短歌の創作、研究を主体とするが、広く文芸作品も可とする」とあり、詩も毎号一、二編が掲載されている。

前号の作品評は、持ち回りで毎号一人が担当し、全出詠者の各一首以上を取りあげているが、評者によっては、褒め言葉ばかり並べているケースが見られる。同人誌であり、全出詠者の作品を取りあげる以上、また集団の雰囲気だけではなく、誌面も含めて「自由に意見を交し合う場」とするならば、プラス・マイナス両方の〈評〉があって然るべきだろう。

雑誌の大きさはA5判で、各号概ね七〇～八〇ページである。表紙、裏表紙の体裁は、一年・四号ごとに文字の色が変えられているだけで、創刊号から同じである。大胆に空白部が活かされた、これ以上ないほどシンプルなデザインは、ゆったりとした文字組みで見やすい本文とともに、この歌誌の落ち着いた雰囲気を醸し出しているように思う。

短歌ではなく詩であるが、十一号に掲載された中野朱玖子の作品「身丈」をあげる。「手袋が落ちている／手なりに／脱ぎ捨てられた靴下の足なり／首まわりのゆるんだ／セーターの人なり／（中略）／富士青木ヶ原樹海に散乱する白骨／死なり／夜明けのベッド／生なりに／街　スクランブルする群衆の吐息／非在／なり／に」（／は改行）。作歌にもインスピレーションを与え得る作だと思った。

十月批評（作品Ⅰ）

山名　恒子

・飛び立てば必ず自由と信じつつ羽化後の白き蝉は時待つ
遠藤　剛

わが身に引き寄せて思えば胸が切なくなります。きっと誰もがそう信じて飛び立った筈。白き蝉に幸あれ。

・己がもつ彩のすべてを出しつくし庭に静もる紫陽花の花
黒羽　紘子

あらんかぎりの彩を見せきった紫陽花が、今は彩をおさめて静まっているという。その色もまた寂びた美しい色に違いない。作者自身のようではないかと思いつつ、このようにありたいと思わずにはいられない歌でした。

・存在は常たのめなし翔ぶ鳥の何処（いずえ）ならんや我が視野になし
小林　絢子

我が視野にないものの存在はまこと頼みがたいものだと、真理をこのように詠われることの面白さ。世の経典、説話集などを短歌に翻訳して頂きたいものです。

・ああ風変はる天の一隅正座せし亡き夫われを待ちていたるか
庄司　久恵

ご主人を突然に亡くされたその驚き、やるせなさ、理不尽さ、もろもろを、悠然と受け入れておられるように見えて、実は、かすかな風の色にさえも身をそばだてられる繊細な作者。ああ風変はる、初句七文字が切ない夫恋の叫び。

・時間短縮求めて脳はストをする体を張ってうつら、うつらと
武田　節子

なるほど、居眠りは体を張った脳のストライキなんだ、と大いに喜びうーんとうなり、作者ならではの発想に脱帽した歌でした。時短闘争のストならば、うつらうつらも真剣に徹底してやりましょう。

・悔恨は潮（うしお）のごとくわきて充つ　施設に父の逝きし八月
玉川　愛子

見逃せない一首。悔恨は潮のごとくわきて充つ、と嘆きを放ち、その想いが一ます空けになり、施設に父の逝きし八月、と万感の思いをそこに収斂させて悲しみを内に込めておられます。潮のごとくわき充つ悔恨が、作者だけでなく私にも誰にもあることに思い到ります。

・「私は誰」問ひし私に「お前だ」と夫はまだ私を忘れてゐない
月田　藤枝

現世から次第に遊離していくように見える夫を懼れながら、ああまだ大丈夫、と安堵する日々を歌にされたのでしょう。真剣な暮らしの中の真実は、字余りをものともしない強く尊いものがあると教えられました。

・海辺から戻った孫は何がなし夏の顔してたくましくなる
辻本わか子

夏の顔してたくましくなる、に幼い子への期待と愛が滲み出ていてほほえましく、好感の持てる孫歌だと思います。三ヶ月よい勉強をさせて頂きありがとうございました。

十月批評（作品Ⅱ）

岡部千代松

・眺めたり草を取ったり鉢の位置変へたりもして時忘る庭

照山　好子

庭を愛でる作者の気持や動作が込められ、静から動への具体的表現も共感を呼びます。結句の「時忘る庭」はよく効いたよい歌と思います。

・きしきしと素足潜らす幼きを受け止めくるる砂の優しさ

中村　陽子

夏休みに鳥取の砂丘で遊ぶ幼子を見つめている作者の様子が目に浮かびます。幼児がきしきしとなる砂に興味を抱き素足を潜らせている光景を「砂の優しさ」と表現された作者の感性が素晴しいと思います。

・雨多し今年の畑の不出来にて我家のジャガイモ粒の小さく

永野　昌子

今年は各地で長雨による日照不足や集中豪雨など異常気象で農作物に被害が出ています。これも地球温暖化の影響と思われます。ジャガイモ粒の小ささに考えさせられる大きな問題と思います。

・奥多摩の川原で泳ぐ子らのこゑみどり葉ゆるる峡にこだます

深谷　幸子

「奥多摩」の一首ですが、みどり葉の揺れる清流の河原で元気に泳ぎはしゃぐ子供らの光景とその声が聞こえて来ます。少子化の今日、明るくて希望に満ちた歌と思いました。

・同級生がまた一人逝くさびしさに老いのひと日を想ひ出にゐる

宮井　富美

命ながらへば一人またひとりと訃報に接します。共に学び遊んだ同級生ともなれば格別な思いでしょう。思い出多ければ寂しさもひとしおでしょう。想い出に浸る作者の気持ちはよく理解出来ます。

・半世紀政権交代実現し不安と期待静かに見守る

森　五貴雄

八月の総選挙で自民党が歴史的惨敗。圧勝した民主党による政権が実現しました。革命的な政権交代ですが、旧政権の負の遺産も多く大変です。新政権の政策と実行力に期待しましょう。抽象的ですが時事詠として頂きました。

・肺癌の苦痛を解かれ安らかに笑みを浮かべし友を送りぬ

森本　元昭

笑みのある安らかさに接した時の作者の気持ちが推察できます。上句の「苦痛を解かれ」がよく効いた心打つ歌と思いました。

・コーヒーの香りを好む蝉なるか一緒に飲もうと声かけてみる

山田　紀子

網戸に止まっている蝉を詠んだ内の一首ですが、優しさとユーモアに富んだ面白い歌と思いました。確かに網戸に来て鳴く蝉もおります。人恋しいのでしょうか。

合評

座談会

E　本年最後の合評となりました。始めます。今回は十月号から四首を選んで行います。千葉支部の**岡部千代松**会員の

写経終え平和大塔仰ぎ見る成田の山の梅雨の晴れ間に

です。如何でしょうか。

Q　供養のためでしょうか、修行の一つとしてでしょうか、経文を書き写し終え、ほっとして新勝寺の平和大塔を仰ぎ見ると、折しも梅雨は晴れて、成田の山の辺も曇りなく見えた。静かな清々しい気持にひたっている作者の様子がよく表現されています。

H　何時（いつ）、何処（どこ）で、どんな場合に、とはっきりわかる作歌の見本のような歌と思いますね。それに、きっぱりと三句切れの歌になっていて、成功していると思う。

B　いえ、この歌は三句切れではなくて倒置法です。上句で詠んだことを下句で説明するという歌の作りで、わりと簡単に歌が作れてしまう。そのぶん、感動の薄い歌になってしまうし、最近の太陽の舟には倒置法の歌が多いような気がしてならない。

W　写経をするという行為は尊いものだと思う。心が安らいでほっとした気持ちが「梅雨の晴れ間」に出ている。

B　そうなんです。このままでも整っていて良いと思うけど、やはり「梅雨の晴れ間」をいうのではなくて、写経を終えた後の心の有り様を詠まなければ、歌としての深みが出て来ないのではないかと思う。

H　でもこの作者は初めの頃から見ると、がんばっているのが良くわかりますね。自分のある歌を詠み続けておられると思います。

E　では、次は水戸支部の**鶴来けい子**会員の

添削の詠草今日はもどるかと恋文待つごと落ち着かずをり

です。如何でしょうか。

H　この歌の作者は八十路の私と同い年ですよ。それがなんと、「恋文待つごと」という新鮮な言葉を使っているので感動しましたね。

W　そこまで添削の詠草に心をときめかせているのかと、感心してしまう。

Q　添削の詠草を待つ気持を「恋文待つごと」とは、いかに短歌を愛して、歌作りを生甲斐にしていらっしゃる作者であるかがわかります。「落ち着かずをり」にその様子が目に見えるようです。老年でいらっしゃる作者を知っているだけに、純粋で美しい気持を持ち続ける作者に感動致しました。

B　作者は高齢で、しかも車イスの生活なので、思うように外へも歌会へも出られない。それでも歌を作り続けている。作者の心情が「詠草の添削」と「恋文待つごと」によく現われていると思う。作者の年齢や健康状態を思うと、この歌は素晴しいです。

H　この歌の作者は日常生活の中から、心の熱い歌を詠むのが上手いですし、歌一筋という感じを受けますね。

W　一昨年の筑波山の大会には娘さんが車イスを押して来て

いましたね。

B　娘さんも歌がうまいので歌を詠まれると良いですね。

E　三首目は、月の舟支部の**松木昭子**会員の

蒼天を突きて聳える巨木の樹来宮神社に植祀られぬ

を取り上げます。どなたからでもどうぞ。

H　「巨木の樹」は、楠のことでしょうね。

B　そうです。熱海にある来宮神社の楠で、天然記念物になっています。

Q　蒼天を突くように聳える楠の巨木が祀られている来宮神社。この歌から、日本の古い歴史、神を祀る神社や神木を祀ってある場所の雰囲気が、ひしひしと迫ってくるようです。香気があり、大木である楠を仰ぐ作者の敬虔な気持は同じ日本人としてわたしにも自然に溢れてくるものがありますね。

W　「巨木の樹」は、いらないと思う。樹来宮（じゅらいぐう）神社と読み間違えてしまう。

H　初句ですでに「蒼天を突きて聳える」と詠んでいるのだから「巨木の樹」にきまっていると思うの。

B　だからこの場合、上句を「蒼天を突きて聳える楠の」として、下句は神木としての楠の姿を詠むとか、来宮神社のたたずまいを表現するとかすると良いですね。

Q　楠に対する敬虔な気持をもっと出すといいですね。

B　単に祀られている、ということでは無くて、楠と神社と私、を詠み込むと良いと思う。来宮神社は村社だったけど、余りにも古く、由緒のあるということで神社の格が上がったと聞いている。

W　絵はがき的な旅行詠になってしまわないように気をつけないといけないですね。

E　四首目は、大田支部の**宮島マツエ**会員の

この影はわれの護衛かまとわりかつかず離れず音消してくる

です。どなたからでも。

Q「この影」とは作者自身の影でしょう。まるで護衛のようだと、この作者独特のユニークな視点で詠んでいます。「まとわりつかず離れず」も良いし、特に「音消してくる」はニュアンスが面白く、全体に無駄がない良い歌だと思います。

W　良い歌だけど、「音消してくる」は変ですよ。元々、影には音が無いのだから。

B　私は、「音消してくる」が良いと思う。でも、上句が問題です。「この影」はおかしいので「わが影」に直す。「まとわり」という名詞はもともと無いけど、「まとわる」という動詞の連用形を名詞として使っているね。

W　影は付いて来るものだから「つかず離れず」もおかしいのでは。

B　「つかず離れず」は護衛者の宿命みたいなものだから、このままで良いと思う。下句は気に入っています。

H　まとわる人をストーカーと言いますね。

B　例えば「まとわりし影は護衛かストーカーつかず離れず音消してくる」としてはどうでしょう。

W　「ストーカー」にすると、現代っぽくなる。

H　この作者は羨ましい程感覚的な歌を作りますね。

Q　これからが楽しみな歌人だと思います。

E　これで終わります。この一年ありがとうございました。新年号から評者が交替となります。

（記録・山田紀子）

選者　岩橋千代子

鰭ぜいご釣りたて鯵の鋭くて潮の香りをたたみこみゐる　中村　陽子

☆飽きもせずガイドブックに世界地図夢は地球を駆け廻りゆく　浅見　時子

「お父さんどこへ蔵ったの」天国へダイヤルしたい鍵見つからず　今井　芳枝

季満ちてうばらは散れり地に返る刹那もやさし淡きくれなゐ　木村恵美子

合歓ゆらす風の道ありたまゆらの時を違えて枝のゆれあう　黒羽　紘子

☆日蝕の解くれば大地に陽の射して野茨の蕾かすかに震るふ　庄司　久恵

飢餓に遠き日々を生きゐて心まだひもじと思ふ何に渇きて　末次　房江

☆失ひし言葉求めて脳の中探し廻りぬ眠られぬ夜は　土屋　道子

眺めたり草を取ったり鉢の位置変へたりもして時忘る庭　照山　好子

ひぐらしの声遠近に暮れ行きぬ野辺には一つの涼を残して　永野　昌子

選者　武田　節子

日蝕に雲の内なる陽の欠けて昼の暗がり祖の墓おほふ　石塚　立子

涼やかな風鈴の音がとろとろと微睡み誘う里の縁側　上田やい子

腕時計チチッと小さく時刻知らすライフ・スパンの秒読み密か　川村　貴美

郭公の初音に虫もひたりゐむ壁に動かぬ水無月の朝　佐伯　朋子

かんかん帽西瓜手に持ち伯父が来る盆のあとさき幼日の家　多久和玲子

☆悔恨は潮のごとくわきて充つ　施設に父の逝きし八月　玉川　愛子

捕虫網ふりまはしつつ幼らは野に虫の時間を駆けてゆくなり　玉川　愛子

☆失ひし言葉求めて脳の中探し廻りぬ眠られぬ夜は　土屋　道子

賎ヶ家の夜長はことに寂しけれ真闇の中に木々は眠りぬ　栂野　蕗

☆奥多摩の川原で泳ぐ子らのこゑみどり葉ゆるる峡にこだます　深谷　幸子

選者　森本　元昭

☆飽きもせずガイドブックに世界地図夢は地球を駆け廻りゆく　浅見　時子

新たなる制度のもとで法廷に市民目線の裁きが始まる　梶川喜與志

再婚の妻との離婚の決まりしに涙出でざる寒色の夏　君塚　一雄

宮城より牛舌届くほろほろと冷凍の声自然に解ける　鈴木美智子

☆悔恨は潮のごとくわきて充つ施設に父の逝きし八月　玉川　愛子

盂蘭盆会逝き人みんな茄子の馬乗りて帰り来懐かしの家　富原　澄枝

☆奥多摩の川原で泳ぐ子らのこゑみどり葉ゆるる峡にこだます　深谷　幸子

日蝕に人かげのなき硫黄島擂鉢山は淒しみ尽くす　松本　啓子

☆闇明かる時かすかなる風うけてゆるぶや蓮のはなびら一つ　山名　恒子

ウォーキングあかねの雲に鳥の影今日一日もかろく去りゆく　よしだゆきお

選者　上田やい子

惜しみなく夏の一日を蝉しぐれ明日は鳴かぬ命もあらむ　遠藤　剛

今日もまた極り文句で娘に電話　ひとり身されど日々事も無し　小貫　昭

☆日蝕の解くれば大地に陽の射して野茨の蕾かすかに震るふ　庄司　久恵

投票日を待ち切れず行く期日前嶺岡山に雲立ち昇る　髙﨑　邦彦

睡蓮の葉窪の大き水玉に生れしばかりの青空（そら）がゆれゐる　玉川　愛子

携帯で十三ケタの番号を押すとつながる祖国日本　豊島　英明

未熟児で生れし吾が槍ヶ岳頂きにたちて母へありがとう　藤井　武徳

のどかなるいすみ鉄道青田行くふるさとの灯をともしつづけおり　森　五貴雄

☆闇明る時かすかなる風うけてゆるぶや蓮のはなびら一つ　山名　恒子

枯れ山の遅き芽吹きはもどかしく彩なき里に春を待つ身は　栂野　蕗

髙　﨑　邦　彦

夏寒くおろかな歴史を拒みをり娘に歩ませてならぬ道程　中村　陽子

巻頭「夏寒く」二十五首詠は、戦争を体験した世代の歌人が、残して置かねばならない大切な歌群。短歌は、人間の情に直接訴える事が出来る最も勝れた文学。阿部先生はその大著、和歌文学発生史論の中で、「訴えそのものが〈うた〉の基本」と述べているのは、その事を念頭に置いたものと言えよう。多くの戦争文学がある。多くは有名な作家や学者や詩人達が残したものである。しかし真実美しく悲しく、そして直截に戦争の愚かさを訴えているのは、地道に、真剣に、そして大切に歌を詠み続けている私達無名の歌人達なのだ。オバマ大統領は核軍縮を言っただけでノーベル平和賞をもらった。しかし、アメリカは自国が率先して核を失くすとは言った事が無い。二十世紀以降世界の戦争のほとんどにアメリカは関与して来た。そして日本に沢山の米軍基地がある。こんな社会を、日本を私達はおかしいと思わなくてはならない。その為にこそ、私達歌人が、戦争を体験した歌人が、名声を求めない歌人群が、多くの戦争の歌を残して行かなければならない。この「夏寒く」は、夫、作者、そして作者の父母の戦争体験が鮮明な記憶の集積の中で、戦争を知らない私の胸を深々と貫いて離さない。そして、抜芳歌は、戦後六十年の長きに渡り、作者の精神に蓄積され、あるいは浄化され、あるいは新しく加えられた現在社会のあやうさの全てを集大成した叫びであり訴えなのであった。

飛び立てば必ず自由と信じつつ羽化後の白き蝉は時待つ　遠藤　剛

羽根を持った生物は全て自由であろうか。全ての生物には制約があり、絶対的自由はあり得ない。しかし羽化後の蝉は自由である事を信じて疑わない様に作者には思える。長い地中での時間を思えば尚更である。私は子供の頃夏になると地中より沢山の蝉の幼虫を取り出し、蚊帳に這わせて羽化を楽しんだ。しかし抜芳歌の様な思いを持った事が無かった。その頃私もまだ羽化前の幼虫であったのだろうか。

郊外の電車にひとり目瞑れば連結機の触れ機織るリズム　久保田昭江

それは老人ホームに身を寄せる義妹を見舞う車中での感慨であると言う。電車の揺れは連結機の触れ合う音。まるで機織の音と同じリズム。あるいはそれは祖母や母に一直線に繋がる音なのではあるまいか。親しい肉親との暖かく懐かしい思い出の音は、今生きて長く親しんで来た義妹への懐かしさに相通う。今の作者にとって、車中は最も満ち足りた一人の道行きだったのではなかろうか。

前々号（298号）秀歌抜芳

笑顔なき老人ホーム凍てつきぬ違和感見せぬ職員達は

狐塚　秀子

老人ホームの職員を身内に持つ私にとって、抜芳歌の現実は読むのも辛い。どんな状態であろうとも老人は肉親と共にあって死を迎えられるのが理想。しかし地域社会の崩壊と核家族化はそれを不可能にした。国の施策は後手に回り施設も職員もその職員への報酬も不十分だ。かくしてホーム内は抜芳歌の様な状態になる。職員は違和感を持ちながらどうする事も出来ぬ現実に苦しんでいる。深刻な問題を鋭く提起した秀歌だ。

郭公の初音に虫もひたりゐむ壁に動かぬ水無月の朝

佐伯　朋子

六月、郭公の初音の聴こえた清清しい朝、その声に聴きほれていた作者が、ふと壁に目を向けると、そこにはじっと動かぬ虫。それはまるで、作者と同様に郭公の初音にじっと耳を傾けている姿であると言う。自然の中に、人も虫も郭公も渾然一体となって溶け込んでいる見事な一体感が何とも美しくやさしい。この様に自然を感じ取れる感性を私も身に着けたいと願う。

トリトンは球状にあらずとボイジャーは夢を確かめ果てなむ宇宙へ

酒向　一次

「天体ショー」と題する七首、ビッグバンから始まり、未だに膨張し続けている広大な宇宙の様々な姿を詠んで興味深い。その中でも抜芳歌は人類が製作した惑星探査機ボイジャーによって海王星の衛星トリトンが探査され、大気の発見等沢山の新発見をもたらし、太陽系から離れて行った有様を見事に表現した。人類の英知は大きな夢の実現にこそ生かされるべきだと、大宇宙からボイジャーは今も叫んでいる。

飢餓に遠き日々を生きゐて心まだひもじと思ふ何に渇きて

末次　房江

それは「飢餓の記憶とほく戦にかさなりて南瓜の花の炎天に咲く」と深く重なる。戦から復興した日本に今飢餓に苦しむ人は少ない。最近の格差社会が、飢餓を生み出している事は憂うべき事ではあるが、少なくとも作者の周りには無い。しかしそれは生物的飢餓であって精神は別のもの。最近の日本社会を取り巻く閉塞感は良心的な人々に精神的飢餓を生み出している。そんな満たされない精神の閉塞状況を繊細に表現して見事だ。

逝きし母の便りの中に挟まれし花弁欠けたる茶の桜花

高橋　和子

大切に持ち続けている母からの便り。母はその中に桜花を挟んでくれた。母への想いの、そして母から子への想いの満ちた手紙。それも古りて来て今はもう花弁も欠け、花も又茶に変色してしまった。しかしそれが尊い。形有る物は変化し続

髙　﨑　邦　彦

けるが、心は変化する形を補う様に膨らむ。私も父が死んで三十二年、今だに手紙を大切に持っている。花など挟んではないが。母を想う作者の美しい心根を尊いと思う。

繰り返し鳴く鴉ゐて下枝に羽ばたけど飛べぬ烏が一羽

武田　節子

親鴉が子烏に巣立ちを促しているのであろうか。あるいは下の烏は傷付いているのであろうか。上にいる「鴉」は形声によって出来た漢字。牙（が）が音をあらわす。意味は「はしぶとからす」「烏」は象形。烏の象形から線一本を略す。体が黒いので目が見えないからだそうだ。作者はこの事を知っていて漢字の使い分けをした。上と下の鴉と烏の関係と有様が映像的に浮かんで来る。現代短歌が読む短歌である事を意識した所産と言えようか。

この時に花咲かせねば実は出来ぬ紫式部の声が聞こえる

照山　好子

紫式部は花の名前。由来は平安時代の女流作家紫式部だが、もともとムラサキシキミと呼ばれていたためと言われている。「シキミ」は「垂る実」実が沢山なるという意味。抜芳歌、花と人物の両方を生かしながら、見事に歌として結実させた。花が咲かなければ実は出来ないのは、花も人も同じ。紫式部は藤原道長の庇護の元、見事に花を咲かせ実（源氏物語）を結んだ。「この時」とは言い得て妙。結句の「声が聞こえる」に呼応して力強い。

携帯で十三ケタの番号を押すとつながる祖国日本

豊島　英明

遙かイギリス・ハルの地にいて、私達には分からない異国の生活実感を伝えて来て新鮮。抜芳歌、携帯電話のケタ数の違いによって祖国日本を思う。国内は十一ケタ。しかしイギリスからは十三ケタ。その二ケタの違いがとてつも無く大きく遠い。外国暮しの経験の無い私だが、今も故郷能登は遠い。

めっちゃ美味しいに吾は馴染めず滅茶苦茶に壊れたあの日敗戦の日

長須　正文

戦争世代が集まって敗戦の日を語り合うと留まる所を知らない。それ程一人一人にとって重い一日。作者は、最近の省略語に馴染めない。いや馴染もうとしない。それこそが作者の全ての原点。現代日本の言葉の乱れはそれ程にひどい。言葉は生き物、変わって当然と言う者も居るが、許せない変化もある。あの敗戦の日の喪失感と怒りに相当する程に言葉の乱れは認められないと作者は叫ぶ。私は敗戦の日は知らないが、作者の気持は十分に理解出来る。

峡ふかく川の流るるぼんやりと夫と二人で野に入りてこそ

深谷　幸子

前々号（298号）秀歌抜芳

そこは奥多摩。山峡深く入り川の流れをぼんやりと見詰めている作者に言い知れぬ安らぎがある。それは自然の内懐に抱かれた人間の原初的な安らぎ。それにも増して夫と一緒に居、一緒に同じ風景を見、同じ呼吸をしている安らぎと知る。下句結句の「こそ」に言い知れぬ喜びと感謝と愛情が含まれていて、心温まる秀歌となった。

胡の話聞きつつ浮かぶウイグルの騒乱騒ぎと国の変遷

丸山孝一郎

「胡」は秦時代は匈奴を指す。唐時代はシルクロードの往来が活発になり、西方ペルシャ系民族を西胡、内モンゴル東部に居た民族を東胡と呼び、彼等はモンゴルとツングースの雑種と言われている。中国には「胡」のつく言葉は沢山有り、中国の文化の一つともなっている。その一部が、ウイグル族を中心に自治区として中国に組み込まれた。ちょうど胡のつく食材から胡の勉強をしていた時ウイグル自治区の騒乱があった。少数民族の悲しみを真実作者は実感した。

童心で抜き手砂山清見の海声まざまざもみな仏かな

山本　賀子

清見の海は何処か、私が知っている清見は飛騨高山の清見と静岡清水の清見。海があるのは静岡。しかし定かでは無い。唯そこには美しい海と砂山があり、子供の頃に童心で泳いだり、砂遊びをした。その時の友達の声が今でもまざまざと思い出されると言う。私も子供の頃の遊び場は海、よく分かる。そしてその友達はもう皆死んでしまったと言う。「かな」の詠嘆が深い。

白き肌余計なものは何も無く地球にやさしい固形石鹸

吉田　律子

「白き肌」は石鹸の肌。現代の化粧品は多種多様。化学製品の典型。化粧品の原価は安いのだが、安くすると女性は買わないから高くしてると聞いた事がある。化粧は女性の虚栄の一種でもあるからさもありなんと納得しているのだが、直接肌に付ける物が化学製品である事を私は恐ろしいと思う。最近そんな風潮に逆らってエコ製品としての石鹸が売れていると言う。抜芳歌、現代風刺の歌としておもしろい。

義理の兄眠る木曽駒ガスの中寂しく揺れるクロユリの群

吉田　昌夫

表題に「千畳敷カール」とあるので、ガスで見えない木曽駒ヶ岳を見ている場所は千畳敷なのであろう。義兄は木曽駒に葬られている。その義兄に会いに行ったのにガスで断念せざるを得なかった。その無念の思いをクロユリの群に託した。あるいは義兄が愛した花だったのかも知れない。作者の感情を内に納めて十分に作者の感情を生かす情景描写が生きている。

文法講座

文語で短歌を詠む人のために（十二）

奥田　清

(一)　受身・可能・自発・尊敬の助動詞

(1)　る・らる

①　受身（れる・られる）

おそらくは知らるるなけむ一兵の生きの有様をまつぶさに遂げむ（宮　柊二「山西省」）

娘の裡に秘められしこと思ひみる明日の綿の実爆ぜるであらう

②　可能（ことができる）

冬はいかなる所にも住まる。（徒然草）

閉ぢられぬ石の仏の目も濡らす若葉雨降る美濃謡坂

③　自発（自然と…れる）

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮（西行）

つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天降り来むものならなくに（和泉式部）

④　尊敬（お…になる）

角を突きあふ牛に心を遊ばれし後鳥羽上皇に遠し都は（阿部正路「火焔土器」）

竹群に居給ふ石仏かしげらる面の慈愛にシャガの花咲く

活用の型は下二段で、次のようになる。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	接続
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	四段・ナ変・ラ変の未然形
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	右以外の動詞の未然形

○「可能・自発」に用いられる場合は、命令形がない。

○接続は、「る」は、四段・ナ変・ラ変の未然形からである。焼酎好きの筆者は、「薩摩白波」の「シラナミ」、即ち「四・ラ変・ナ変・未然形」と憶えた。「らる」は、その他の動詞の未然形に接続する。この接続のしかたは、後述の助動詞にもみられるので、シラナミは、しっかり憶えてください。

(二)　使役・尊敬の助動詞

(2)　す・さす・しむ

①　使役（せる・させる）

空曇る霜月師走　日並べて、門の落葉を　掃かせけるかも（釈　迢空「水の上」）

風雅をば解せぬ吾らも祈らする雨に濡れたる蔦翁の墓　案内せさせて入りたまひぬ。（徒然草）

愚痴蒙昧の民として　我を哭カしめよ。あまりに　惨く死にしわが子ぞ（釈　迢空「水の上」）

戦ひは有能あまた逝かしめて遺作は呻く無言館なり

②　尊敬（お…になる）

御覧じて、いみじう驚かせ給ふ。（平家物語）

ひそかに入寺せしめたまふ。（　同　）

歌帖余白（七十二）―編集雑記―

松岡　三夫

大正八年十二月二十二日　築地二丁目路地裏の家漸く空きたる由。竹田屋人足を指揮して、家具書筐を運送す。曇りて寒き日なり。午後病を冒して築地の家に往き、家具を配置す。日暮れて後桜木にて晩飯を食し、妓八重福を伴ひ旅亭に帰る。この妓無毛美開、閨中ききょすること頗妙。

―永井荷風『断腸亭日乗』―

大正六年九月十六日から死の前日までの四十二年間に亘って日記『断腸亭日乗』を書き続けた永井荷風は、明治十二年（一八七九）十二月三日東京市小石川区金富町に内務省衛生局勤務の永井久一郎、つねの長男として出生。本名は永井壮吉。号は断腸亭主人、金阜山人。耽美的な作風で明治から昭和にかけて活躍した小説家。昭和二十七年（一九五二）に文化勲章を受章。二年後には日本芸術院会員。昭和三十四年四月三十日七十九歳で没します。

その間に全集にしても十数巻にもなる作品群を作り出します。よく知られているものだけでも、『地獄の花』『あめりか物語』『ふらんす物語』『冷笑』『すみだ川』『珊瑚集』『日和下駄』『腕くらべ』『おかめ笹』『つゆのあとさき』『墨東奇譚』『踊子』『断腸亭日乗』と文字通り枚挙に暇がないほどです。

ところで永井荷風ほど女性に愛されない小説家は少ないといわれます。荷風が女性を女体としか見なかったと誤解されていたからだと思います。最初に引いた『日乗』の最後の「妓八重福を伴ひ旅亭に帰る』の件も急いでせっかちに読むと誤解してしまいます。

代表作『墨東奇譚』は、取材のために訪れた向島は玉の井の私娼窟で小説家大江匡はお雪という女に出会い、やがて足繁く通う話。物語はこうして墨東陋巷を舞台につゆ明けから秋の彼岸までの季節の移り変わりとともに美しくも哀しく展開していきます。女体遍歴ではなさそうです。

そこに描かれる小説家大江は、荷風の分身ではありますが、きわめて虚構性・匿名性の強い人物で、大江の書く小説を物語の中に挿入するという二重構造により、一層それが際立ちます。その虚構性が、矢張り虚構の世界に生きる娼婦と感応して、写実的でありながらファンタジックな雰囲気を醸し出しています。読者は、主人公が巷間を漂うまま、ともに流されていくしかないのです。それは一種気持のよい根無し草感覚といえます。どうやら荷風が女性を女体としか見なかったという見解は当らないようです。

この小説の中に物語を挿入するという二重構造による、虚構性・匿名性により作品を豊かにする技法を、詩歌にも生かすことができないかと考えるのです。詩歌の中に詩歌を読み込む技法を、本歌取り以上に生かすことの意義は小さくないと思えるのです。永井荷風の自選百句のうち二句です。

極楽に行く人送る花野かな

襟まきやしのぶ浮世の裏通

作歌の目・作歌の技法（第五十九回）

作歌の技法（入門編）

三木　勝

歌を作るときの技法を、入門・初級・中級・上級の4段階に分け、4回にわたって考えてみよう。入門編は、年齢のいかんを問わず、短歌を初めて作る方々を念頭において進めてみます。

短歌を始めるにあたって、初めに心得ておくべき重要なことは、ふたつあると思われる。ひとつは、短歌の形式は五七五七七の定型であること。もうひとつは、短歌とは己の感動を読むものであることを知ることである。このふたつは、作歌の行為においては、いかなることがあっても崩してはならない。はじめのうちは、定型の枠に語彙がはまらない事で困ることがある。この場合、無理に造語めいた語を使わずに、一般に通用する語を用いて、定型を遵守という鉄則を守って、乗り越えていかなければならない。

短歌は、己の感動を読む道具である。表現に行き詰って、とにかく五七五七七にすればいいと思って、安易な表現で誤魔化してはならない。表現を誤魔化さず、的確な言葉を探し続けるということは時には苦しいことである。この苦しみこそが、技法を鍛えてくれる。短歌を始める方は、初心者の心構えとして、このことを自分に課するとよいであろう。これは技術的な問題ではないので、誰にでもすぐにできることである。この心の構えは単純なことである。しかしその単純さは短歌の道を進めば進むほどに、作歌上の大切な課題であることが分かる。短歌を極めれば極めるほどに、この基本こそが、短歌の、作歌の技法の核心であることが分かってくる。基本は高度な技巧よりも重要である。

短歌を始める動機は、なんでも良い。真剣であろうと、遊びであろうとも。命懸けであろうと、暇つぶしであろうとも。何でも良いのである。しかし、例え遊びのレベルであっても、一所懸命に歌を作っていくと、いつの間にか、真剣に歌を作るようになっていくものである。それは、歌そのものの中に、作歌する者をその方向へと向かわせる力が内蔵されているからである。この歌の力に信頼して、作歌を忍耐強く続けていけばよいのである。半信半疑の方は、騙されたと思って、進むしかない。騙されたと思っても良いと思って、短歌に精進することは、求道の手段としての短歌への信仰的な態度ともいえるであろう。短歌には、それほどに、自分とは何か、自分は何のために生きているのか、人生とは何なのかを、いつの間にか作者に考えさせていく機能を内包しているのである。

一方そんなに難しく考える必要もないであろう。「作りたいから作るのである」で、十分であろう。自分の命に対して自分が主権者であるように、自分が作る短歌に対しては、自分が主権者である。好き勝手に作ろうとも、自分の作品に対して、主権者として責任を負う時、言葉や視点に対して、自ずから慎重になっていく。この慎重さが、厚みのある歌へと繋がっていくのである。

では、実際の作品から作歌の技法について考えてみよう。

車窓より見渡す限り草緑スイスの国のメルヘンの景

この歌からは作者が一番感動した「スイスの国のメルヘンの景」が伝わってこない。それは、「スイスの国のメルヘンの景」の中に具体的なものが描かれていないので、読者は、何に感動して良いのか分からないからである。この様に読者にイメージさせる具体的な言葉がないと、感動を伝える力が弱い。

「草緑」は「草の原」や「見渡す限りの草原（くさはら）の」程度でよいであろう。造語に頼らないこと、適切な言葉を探すことは大切である。言葉を探す努力が、作歌の力を高めていく。

伝えたい燃える思いを伝えたい木も森も山も燃えつくすほどの

まずは、五七五七七の定型を守っていないことを指摘しておきたい。七七ではなく八八になっている。字余りは、五七五七七の全体の中でも一箇所に留めておきたい。

さてこの歌の場合、五七五七七の定型を守っておれば、作者は、もっと言葉選びや表現方法についての検討を、歌自身から求められたであろう。五七五七七を守らずに、五七五八八に甘んじたという作者自身の定型に対する妥協の姿勢が、この歌の作歌活動において、更に一歩を進めて、自分自身の心の旅を、進める機会を失わせたと言えよう。

定型を守る、語彙にこだわるということによって、自分の心への旅を、自然に深化させていくのである。歌は何の為に作るのか。作者が自覚するかしないかにかかわらず、歌は作者に作者の心の旅をさせていくのである。心の旅を意義あるものとする為に、定型を守り、語彙にこだわるということは、作歌の上でのひとつの大切な技法なのである。

ためらわず一匹の虫撃ち落とす今朝初孫の帰り来たれば

この歌は、生まれたばかりの初孫が、今朝初めて病院から家に来る（帰ってくる？）のを待っている時の情景を歌ったものであるが、この歌のままだと、今朝初孫が帰って来て、その孫がためらわず一匹の虫撃ち落とした、という趣旨にもとれる。「ためらわず一匹の虫撃ち落とす新生児の孫帰りくる故」とすれば、普段は虫一匹殺すにもためらいを持っている作者が、初孫が帰って来るとなると待つ家の中にいる虫を躊躇せずにはたき落とした、その利己的な心に驚いたという発見が伝わってくるのではないだろうか。

短歌をはじめてやる方にとって、上達していく技法のひとつは、いま心の中にある思いをすべて歌にして吐き出し、もう歌う事がない、これから何を歌おうか困る、それ位に、いまの思いを、それが尽きるまで、吐き出し続けることである。この段階を経ることによって、自分の思いばかりが先走りしすぎて、作者の思いが、歌意となって現れてこないという段階を乗り越えていくことができるのである。

歌会報告

本部歌会　10月例会（第356回）　（北川記）

日　時　10月10日（土）13時～16時40分

場　所　きゅりあん（品川区立総合区民会館）

司　会　生稲　進同人

出　席　30名　出詠　30首

「太陽の舟」は十二月号を以って通巻三百号を迎えるに当り、松岡編集長から多くの方の原稿の投稿の依頼、また代表から岐阜支部での吟行会への参加の呼びかけがありました。

・落日に静かに濡れる佛たちなほ遠く土の底まで續く

「天山離離（雁の塔・洛陽の日）」

代表の解説　洛陽は先生の憧れの古代都市で「生きるなら蘇州死ぬなら邙山」と言われる邙山には巨大な古墳群がありその内部は底が知れない。先生は中国の巨大さを体感しつつも更に大きな世界を詠われていると改めて思い知らされた。

今月の歌会でも代表及び各会員の論評から言葉一つ、助詞一つの推敲で歌の深みが大きくなることを実感しました。

今月の高得点歌は左記の通りです。

・見て聞きて飲み込みゐしも体験はこれ又違ふ老いといふもの　中村　陽子

・空の色映すにあらず摩周湖は己が身の色深めて湛ふ　武田　節子

・目覚めればすなはち主婦の稼働時間これが〈青い鳥〉かも知れぬ　川村　貴美

（塩田記）

水戸支部　支部長／長須　正文

日　時　10月4日（日）13時～16時

場　所　びよんど（男女センター）

出　席　15名　出詠　21首

講　師　高崎　邦彦先生、長須　正文先生

司　会　塩田　秋子

水戸支部大会が高崎先生を迎えて開かれた。初めに阿部先生の「短歌のすすめ」の抜粋をいただきその中にある、土屋文明の「思ふがままを率直に歌いあげることが最初にして最後である」が一番大事な事と教えて頂いた。

次に歌会に移り感想を一首につき一人が述べその都度、両先生の講評をいただいた。

・蕎麦粉ひく石臼ゆっくり廻しゐる夜なべの母の夢に若かり（高得点歌）　諸　幸子

・蜩を遠くに聞きて菜園に野菜談義の尽きざる初秋（高崎先生選歌）　福地　啓子

（志賀記）

渋谷支部　支部長／志賀　倭子

日　時　10月10日（土）10時～12時

場　所　きゅりあん（品川区立総合区民会館）

司　会　志賀　倭子

出　席　8名　出詠　8首

秋天に恵まれ本部歌会前の二時間を有意義に「支部歌会は勉強の場」の意識のもと、皆様和気藹々乍ら活発に発言され、

お互いに啓蒙されました。

・空澄みて雲ひとつ無し　地の上の哀楽なべて影を引きをり

◎夜空澄み雲ひとつなく人の世の哀楽なべて影を引きをり

中村　陽子

残りの30分で10月号の生稲、北川両同人の七首詠を、作者の説明を聞き作歌意図を汲み乍ら鑑賞しました。

（深谷記）

柏支部　支部長／末次　房江

日　時　10月16日（金）12時～15時

場　所　アミユゼ柏

出　席　11名　出詠　24首

司　会　深谷　幸子

天高く馬肥ゆる秋、新米の短歌もあって、昔の嫁の話など交え、ゆっくりと一首づつ語り合いました。作者の心に感じたことに共感しつつ今月の歌会を終えました。

・津波来る予報気になり秋雨の展望台より海原見つむ

塚本　正子

・新牛蒡ささがきに削ぐ昼さがり夫の好みの柳川鍋に

角田　順子

（塩田記）

水戸支部　支部長／長須　正文

日　時　10月18日（日）10時～12時

場　所　岩間公民館

出　席　四名　出詠　10首

司　会　塩田　秋子

・一面に倒れ伏したるこがね田に影を落として雲ながれゆく

斉藤由紀子

倒れ伏すのは、台風の場合と実り豊かな場合とがあるそうだ。

（長沼記）

大田支部　支部長／庄司　久恵

日　時　10月26日（月）

場　所　大森山王高齢者センター

司　会　長沼　温代

出　席　6名

高山吟行会へ三名の方々が行かれ、淋しく思っていた所、久々に河口同人の出席があり、六名で会を進めた。それぞれの歌の批評の纏めは三木先生も御欠席の為、川村さんに短歌には奥行きが必要である等適切な助言を戴いた。長嶋氏の謡を取り入れた短歌に、「柏の葉」は狂女との事など解説して戴き少し知識が増えた。

・柏の葉の夫子慕ひて西の方金帯輝き落陽燃ゑ入る

長島　宏

掲示板

本年伊勢の国一宮椿大神社の献詠祭に秋田八郎潟支部の土橋茂徳支部長の短歌が生多さかえ選に入賞されました。大慶です。

・屋上に避雷針を煌かせ（予報夏日）の朝陽が昇る

お詫びと訂正（11月号）

二十六頁下段十九行目　思うほゆ→思ほゆ

創立三十周年記念・三百号記念
平成二十二年新年会のご案内

太陽の舟が創立三十年を超え三百号を達成したことを記念して平成二十二年の新年会を開催いたします。

日　時　平成二十二年一月九日（土）十五時
受付　十一時三十分〜
歌会　十二時〜十五時
記念パーティー　十五時十五分〜十七時三十分

場　所　ホテル　はあといん乃木坂（健保会館）
東京都港区青山一―二十四―四
☎〇三（三四〇三）〇五三一
東京メトロ千代田線「乃木坂」駅4番出口真上
都営地下鉄大江戸線「六本木」駅7番出口五分

会　費　一万円（歌会費五百円を含む）

原稿締切　平成二十一年十二月十五日（火）期日厳守

参加希望者は山名恒子（〒145―0064）東京都大田区上池台1―40―18　までお送り下さい。それを以て参加申し込みとします。その際、宛名銘記の返信用封筒（切手貼付）を必ず同封。地方の会員の皆様のご出席もお待ちしています。

七首を選歌してご出席ください。

今年度の新年会は三十周年三百号突破記念のパーティーを中心に開催いたします。是非ご参加ください。

平成二十二年　太陽の舟執筆者年間計画併せて原稿依頼

わが愛する歌　名歌鑑賞　二反田　實

掲載月	25首詠	前々号批評 作品Ⅰ	前々号批評 作品Ⅱ
1月	原田　寛	吉岡悠紀子（11月号）	山本　賀子（11月号）
2月	山田　紀子	吉岡悠紀子（12月号）	山本　賀子（12月号）
3月	よしだゆきを	吉岡悠紀子（1月号）	山本　賀子（1月号）
4月	杉山　榮子	宮原喜美子（2月号）	冨永　道子（2月号）
5月	永野　昌子	宮原喜美子（3月号）	冨永　道子（3月号）
6月	岩橋千代子	宮原喜美子（4月号）	冨永　道子（4月号）
7月	飯塚　裕子	井上萬里子（5月号）	鈴木　熹子（5月号）
8月	土屋　道子	井上萬里子（6月号）	鈴木　熹子（6月号）
9月	森田　勝昭	井上萬里子（7月号）	鈴木　熹子（7月号）
10月	湯本　いと	山田　玲子（8月号）	緒方　善丸（8月号）
11月	森　五貴雄	山田　玲子（9月号）	緒方　善丸（9月号）
12月	深谷　幸子	山田　玲子（10月号）	緒方　善丸（10月号）

平成二十二年　秀歌十首　選者

角田　順子・土方　澄江・酒向　一次・渡辺　幸子

特集　三百号によせて

刻まれる言葉、生きる証し

須藤　宏明

創刊準備号とは、本来、創刊号に対して使われる言葉である。創刊号とは第1号であり、それ以後、2号、3号・・・300号、301号と続いていく。したがって、創刊号とは一冊の雑誌を意味するものであり、その対義語である創刊準備号も一冊を指す。あくまでも、創刊準備号とは、創刊第1号のための単体の冊子である。

しかし、「太陽の舟」の創刊準備号は、昭和五十三年から六十三年の十年間に渡り、五十号・五十冊に及んだ。単体を意味する創刊準備号という言葉の約束性を無視した行為である。当時、阿部正路先生は「創刊準備号五十号はギネスブックだよ」と楽しそうにしゃべっておられた。言葉の厳密性を必要以上に重視し、それゆえ、優れた文学研究の業績を紡ぎ上げる阿部先生であるが、創刊準備号のギネスの逸話は、一方で、言葉の意味性を無化し、自由な概念を楽しむ先生の姿を物語っている。創刊準備五十号という現象は、先生が、言葉の厳密性を第一義に置きながら、それ以上に現在の行動を重視していることを示している。

まことに、先生は、言葉の意味に捕らわれない、言葉の意味を超越した場所で、現時点の行為・行動を生きる人なのである。その行為・行動の具体が「太陽の舟」創刊準備であり、「太陽の舟」創刊・発刊・継続なのである。その結果が300号であり、300号という一地点・一現象なのである。阿部先生ふうに言うと、「300号という言葉は、時間の経過と行為の持続という点において、大きな重みと意味を持つ。厳密に言うと350号と考えるべきかもしれない。しかし、それは、どちらでも良いことだ。数字は一つの遊びだ。だから、大いに遊びを楽しめば良い。300号乾杯！　そして350号乾杯！　大切なのは、今であり、次号を出すことなのだ。さあ、301号に乾杯！」という文脈になる。

先生は歌碑を重視しながら、同時に意味のないものだと、よくおっしゃった。これは、先生の文脈では、矛盾はしていない。先生は、生きている歌人が歌碑を作ることの是非を巡っての議論でも、「故」という文字を入れればそれで済むことだと言う。問題は歌が石に刻まれるという行為・現象にあり、風化して消滅すればそれはそれで良いという思考だ。重要なことは、出来上った歌にあるのではなく、歌を作るという行

為にあるというのが、阿部先生の思惟である。だから、結社不要論を唱えながら、「太陽の舟」という短歌会を持続させているのである。「太陽の舟」という歌碑を毎月作っているのである。我々の言葉は、「太陽の舟」が発刊している「太陽の舟」という誌面、すなわち歌碑に刻まれ、残される。多分、我々の命より長く残るだろう。命は尽きても、歌と言葉はここに残る。毎月毎月の誌面には、我々一人一人の生きる証しが刻まれている。

北林和子歌集『和傘の里』出版記念会をめぐる二話

～酔った阿部先生が懐かしい～

奥田　清

その一――「俺は阿部に勝ったぞ」――

故北林和子さんが、太陽の舟叢書24編「和傘の里」を出版されたのは、平成四年十二月だった。その二十三日に、東京・武蔵野・調布の料亭「白川郷」にて出版記念会が催された。会場は、奥飛騨白川村（世界文化遺産）の茅葺合掌造り家屋であった。由来は、北林さんの従姉妹一家がダム湖に埋没する家屋を新宿に移築しようとされたが、都心では茅葺き木造家屋は防火上不許可、やむを得ず、形のみ凝した「ホテル白川郷」を建て、武蔵野の業者に委譲されたのである。その会で、先生は、飛騨白川の濁酒（ドブロク）の如く酔い。出席していた中村宏幸君（故人国大同級生）と論争、「丁丁発止」二人とも酔っているので、論理も発想も手前勝手、焦点が合わず、とどまるところなく、タクシーの中も、さらに、「ホテル白川郷」の部屋の中まで続き、私の宿泊予定の部屋で、先生はダウン、寝込んでしまわれた。中村君もぐてんぐてんだったが、タクシーで帰宅。出るとき、「俺は阿部に勝ったぞ!!」。その会に出席された方は、寺澤八重子・吉田みさほ・岸田寛さんなど多数だったが、現存者は、須藤宏明氏・土屋道子さんぐらいであろうか。

その二――「太田のビールは高く、岐阜のビールは旨い」――

『国学院大学教授文学博士阿部正路先生講演「文学の発生について」』美濃加茂市中央公民館入口に看板の立ったのは、平成五年十一月二十二日だった。駅に出迎えた私に、「今日は歌を詠んで来ました。」と見せられたのは、後に「火焔土器」所収の「美濃太田へ」の五首であった。駅前で軽い食事。ビール欲しやの顔を無視した。恨めしそうに魚を食べられた。講演は、「易しくわかりやすく」と依頼しておいたが、会場に、大学同期生や先輩などの顔がみられたので、専門的高度な内容となった。が、独特の話術で「学問することのおもしろさ」を伝えられた。終って、酒向一次氏の車で駅へ向かったが、途中で「ビールを」と云われたので、私の知っているスナックへ寄った。ＪＲの岐阜行きにあまり時間がないので、ビール一本のみで、駅へ急いだ。私は支払った。その金額は知られないと思った。

翌日は、北林和子さん「和傘の里」の岐阜での出版記念会が岐山会館にて催される。岐阜へは私も同道した。駅には、先生の国大での教え子、河内克美氏と北林和子さんが迎えて下さった。すぐ岐山会館から河内氏の案内で柳が瀬の飲み屋へ。北林さんは「明日があるから」と辞去された。私も「明日を」心配していたが、阿部先生は、ぐいぐいと呷られた。「太田のビールは高く、岐阜のビールは旨い」蓋し、名言である。美濃太田市には、「付け」があって、それも支払ったのであった。そして飲みつづけ、ダウン。翌日を心配したが、シャッキリ、みごとな祝辞を述べられた。

三百号の港へ寄港する『太陽の舟』

三木　勝

昭和五十三年六月に創刊号を出した『太陽の舟』は、いま三百号の港へ寄港する。岸田寛は夭折し、阿部正路は早世し、『太陽の舟』は、舵を失い、荒波の中、木っ端微塵になりそうな中、舟の上に取り残された者は、互いに手を取り合って励まし合い、嵐を乗り切って、舟の方向性を見出そうと努力をしてきた。その中でも、取り分け、代表の高崎邦彦の努力に敬意を表し、感謝したい。また二十数年本部歌会の司会を引き受けて、太陽の舟短歌会を曳航し続けてきた原田寛にも感謝の意を表したい。

太陽の舟短歌会が今日まで継続でき、社会の文化活動の公器として活動できるところまで、安定性を取り戻せるところまで来れたのは個々の会員の方々の有形無形の献身的な努力によるものであった。その努力をして頂いた方々の芳名を挙げれば数知れない。歴代の編集長、会計掛などの役職者は、言うに及ばず、郵送のための封筒を少しでも安いものをと探し買い求めた故吉田みさをさんのような方々、数え上げればきりがない。紙数をつくしてでも書き留めたい程であるのだが、それができないことは残念な事である。

本部歌会にはほとんど参加されないが長沼温代（はるよ）さんはほぼ創立以来、会を支えてきた。一宮の全国大会でお話させて頂いた山田玲子さんとは、楽しくお話をさせて頂いた。こうやって皆で会を支え、舟を漕いでいるのだと教えて頂いた。

太陽の舟短歌会の第一回歌会は、昭和五十三年七月、三軒茶屋社会教育集会室で行われた。参加者は、岸田寛、石井秀男、逢坂知代の三名。この三名は、太陽の舟短歌会の隆盛を願ったことであろうが、三百号の港への『舟』の寄港の実現を信じていたであろうか。

首都圏に在住している支部会員は、本部歌会への参加は、可能である。また『太陽の舟』の毎月の校正への参加などで、仲間意識を確認できる。地方在住だとなかなかそうは行かない。しかし、地域に拘らず、全国に会員が散在していればこそ、組織の広がりと活力が豊かに生まれてくる。

私は、太陽の舟短歌会が、会員一万名となり、千年続く組織であることを願っている。一万人のひとを集め、千年続く

組織は、どのようにして、可能となるのであろうか。それは一万人のひとの要望に応えられる内容を持ち、それに支えられて、千年間、ひとの要望に応えられる内容を産みだし続けられる指針を組織として持っていることである。

この内容の核心は何かというと、それは使命感である。短歌で日本の文化や社会に安定、生活の豊かさをもたらすことによって貢献すること。そして世界の人々や文化にも貢献していくことである。短歌の中にこの使命（ミッション）があることを組織全体として、自覚することにある。

インターネット上に太陽の舟短歌会のホームページを立ち上げた。徐々に形になりつつある。千年の彼方まで、生者も亡者もともに同舟して、『太陽の舟』を漕ぎ続けよう。

本を手にする喜び

豊泉　豪

自分が書いた文章や作品が印刷物に掲載され、また一冊の本として出版されることを、かつて「活字になる」と言った。それは大変誇らしいことであった。今となればくすぐったく懐かしい言葉だか、早晩死語になるだろう。

専用機としてのワードプロセッサーを経て、パーソナルコンピューターの時代になり、活字は特別なものではなくなった。さらにインターネットの普及により、個人の情報発信力が飛躍的に高くなった現在、情報媒体としての印刷物のあり方は大きく揺らいでいる。そうした時代にあって、歌誌を出すということはどういう意味を持つのだろうか。

仮想的＝バーチャルではなく、確かな触感と重量感をもつ本は、情報の集約物である以上に、一つのリアルな物体として人の胸をふるわせ得る。逆に言えば、今こそ本は、本としてもっと作品であるべきなのではないか。もちろん、中身がすべてであると言うこともできる。すべての本が奇抜であったり斬新であったりする必要など、あろうはずもない。しかし、判型、紙質、書体などに意匠を凝らすことで、本の魅力は倍増する。表現者＝作品の送り手は、やはりこうしたことに無関心であるべきではないと思う。電脳万能の社会にあって雑誌を出すということは、本を手にする喜びを仲間とともに分かち合うということでもある。

「太陽の舟」誌に紙幅をいただいたことで、さまざまな歌誌を実際に手に取ってきた。その感想の一端である。

太陽の舟と私

浅見　時子

「太陽の舟」との出会いは二十数年前通勤途中の常磐線電車の中で川村さまと向い会いの席になり興味津々でお話を伺いお誘いを受けたのがご縁です。

連絡先の電話番号を教えて頂いて慌しくお別れしました。短歌についての基礎知識も何も持ち合わせていない私でした

が、ただ面白そうと子供と同じめずらしい物好き、すぐ飛び付く性格で連絡を致しました。

わが思いを三十一の文字に表現出来るなんてなんと素晴らしいと言いますと、「いいえ膨大な思いを三十一に凝縮して纏めるのよ」と言われました。

何時から会員にして頂いたのか調べようと本棚の整理をしましたら、創刊準備47号というのが出てきました。きっと川村さまが下さったのだと思い乍ら見てゆきましたら、何と「太陽の舟」創刊号に自分の歌が載っているではありませんか。我ながら驚きました。何とまぁ稚拙な歌を臆面もなくとひとり赤くなりました。

永く勤めを続けておりましたので欠詠に続く欠詠で、たまに投稿していた様です。怖いもの知らずで支部会に出席することもあり、才能ない事は承知でも落ち込むほどの批評を受けて考えた時もありました。けれどその頃お元気だった大先輩の藤井さま、現大活躍の土屋さま達から「日記の報告歌で結構よ何でも書きなさい」と励まされました。少し慣れてからは厚かましくも本部へも出席しました。その頃、阿部先生から「あなたの視点が面白い」と言って頂き、むつかしくなくてよろしい平易な言葉で表現して結構とも言って下さいました。

その視点を生かす事も出来ず特別の勉強もせず今日に至っております。お恥ずかしながら短歌は生涯かけてのわが友などという情熱はないのですが、付かず離れずわが楽しみ（苦しみかも）として続けてゆきたいと考えております。

人生何事も出会い、短歌を通じて多くの方々に出会いました。喜びの限りです。感謝で結びます。

創刊の先駆者たちを知りたい

生稲　進

月刊の刊行物が三百号を数えるには何年かかるか？　計算はやさしい。二十五年だ。『太陽の舟』は今からさかのぼること二十五年、四半世紀前、正確には昭和五十三年に故阿部正路師を中心とした十指に満たない人たちによって創刊された。時代は高度経済成長の真っただ中、程なくバブルが始まる。ほとんどの人は日々の暮らし向上のため、仕事や家事に真剣であり、短歌、俳句に目を向けるゆとりがなかった。経済成長主義、バブルという文芸「短歌」にとって強い阻害要因がはびこっていた時に、『太陽の舟』が生まれ、育ったというのは価値がある。だれもが乗っている時代の流れに違和を感じていた、十指に満たない創刊の先駆者は何を歌ったのか。どのように歌ったのか。あらためて知りたい。ページを割いて欲しい。残った我々もおそらく先駆者を追いかけることになるのだから。

太陽の舟と水戸支部

岩橋千代子

毎月届き何気なく頂いている太陽の舟誌、三百号と聞いて改めて越えてきた歳月を偲び、これまでの編集の方々の御苦労いかばかりであったかと只ただ感謝の一語でございます。

そしてこの間にお見送りした阿部先生始め水戸支部では長南先生、加藤先生その他仲間の誰、彼のお顔が走馬燈のようによぎり、今更ながら光陰矢の如しを痛感致しております。

水戸支部は故阿部先生と故加藤先生が同郷の誼でみな一緒に入会、会の皆さま方からの刺戟を糧として励んでおります。

現在長須先生を中心に月一回水戸での「うた会」と故加藤先生との勉強の場であった岩間での勉強会をもっています。水戸では「うた会」もさることながら先生のミニ講座、諸々歌人達の生きざま、うたの流れなど大変参考になっています。年一度の大会には高崎先生にわざわざ御足労ねがって緊張の中にも和やかさありで充実した時間を過しています。本当にありがたいことだと思っています。

岩間での勉強会は地元の深谷さんにご面倒かけながらこれも月一回集まっています。

お互いでお互いのうたをみつめ合い、意見を出して最後に先生からの批評に耳を傾けます。気楽な仲間同士の集まりも捨てがたいものがあります。若い仲間が増えるよう願っているのですがなかなか思うようにまいりません。私達もいつの間にかすぐ加齢の語が頭について廻る年代となり心許ない日々ですけど、「うた」への意欲だけは持ちつづけ、太陽の舟の一員であることに誇りをもって水戸支部をもりたてていきたいと願っています。

三百号お祝とともに水戸支部の現状ご報告申し上げます。

涙ぐむ思い

川村　貴美

・三十一の語に託し来しわが一生諾ひゆかなその果て知らず

三〇〇号記念特集号に名を連ねるに当り、私の本棚一段を領している〈太陽の舟〉創刊準備号から創刊号及び第二十巻に至るまで、一冊一冊手にとって見ました。そして今、会員一人ひとりの心を籠めた短歌の数々、力作に感動し涙ぐむ思いでペンを執っています。

私の短歌歴は昭和四十三年から。思えば四十数年になります。ギネスブックにも載るかと主宰阿部先生が冗談に仰言った十年もの創刊準備期間を経て〈太陽の舟〉の創刊号が出たのは昭和六十三年一月一日でした。年号も平成となり大海に漕ぎ出ましたが平成八年、編集長の岸田　憲氏が亡くなられ、平成十年、十一年の一年六ヵ月間〈ナイル〉に合併という試練に遇いました。併し同年九月には新たな〈太陽の舟〉の出発しなり、全会員固い決意　をもって結集しました。世は二十一世紀を迎え意気熾んでした。併し平成十三年(二〇一〇

年）六月二十七日主宰の阿部正路先生ご急逝なさり、全員茫然としましたが、以来先生の愛弟子髙﨑邦彦氏が代表として献身的努力をして下さって今日に至っています。

思えば長い道程でした。初期の頃の歌友の大方が夜の〈太陽の舟〉の人となっておられる事に　今更乍ら愕然としております。お互いに励まし、励まされながら一筋の道を歩んで来たこと、又若い人達からバイタリティを頂いている事に感謝、師と崇める阿部先生のあの迫力あるご指導を旨とし、その果て知らず詠い続ける〈うぐひす〉でありたいと現在考えています。

「日常」の開拓

熊谷　香織

二五〇号に抱負を載せてから四年が経った。現在改めて読み返してみて、我ながらなんとも大それたことを書いたものだと恥ずかしく思う。だが、当時は緊張して何度も推敲したことを覚えている。

この四年間を振り返り、短歌に関して収穫であったと思うことは、「こういうものに目を向けていきたい」というテーマや視点を得られたこと、拙いなりに文語で短歌を作ることができるようになったこと、である。しかし、二つの武器を手に入れたと同時に、似たような短歌ばかりできるようになって、自分の短歌に飽きつつある。そのくせ、最近では三日間一首もできないと、もう短歌が作れないのではないかと不安になる始末である。

自分で自分を開拓することは難しいが、自分に飽きはじめた以上、あがいてみようと思う。結果後悔するとしても、そこに何らかの感動や出会いの可能性を求めていきたい。今まで見ようとしてきたものが「日常の中の、今まで目を向けていなかったもの」であるとしたら、今後はその前提としてある、「日常そのもの」を押し広げる工夫もしていきたいと思っている。

四年後、この文章を読み返して苦笑し、またその時作っている短歌が今より面白いものだったら、私は嬉しい。

忘れられない人達

久保田昭江

私が寺澤八重子さんと初めて会ったのは、近くの小学校体育館で、家庭婦人対象の体操クラブへ入会した時だった。長い間寝たきりの姑を看取り、子供や他の家族の世話などで身も心も疲れてやり場のない毎日だった。

健康がどれ程大切かしみじみ実感し、進んでこのトリムクラブを選んだ。組体操ではいつも寺澤さんと一緒だった。私より十年も年上なのに、身軽で横木へ向けて腕を立てひょいと逆立ちしては見せてくれた。体操の合間に交わす話も多くなり、〈鉛筆一本で楽しめる短歌〉の話題が占めるようになっ

た。（その頃『古の聲を聴かな』を出版された）

寺澤さんの勧めで、近くで開かれる歌会にも出て見たり、見学することで大層和やかな雰囲気が感じられた。その席には、斉藤まき子さん、古賀米子さん、水上玲子さんなど居られた。後に〈太陽の舟短歌会〉であることの説明を受け、阿部先生の主宰であることも伺うことが出来たのであった。国学院大学では当時娘もお世話になったばかりなので、親子共々頭の下がる思いだった。

初めて本部歌会へ出席したのは、鎌倉の会場だった。寺澤さんと新たな思いで朝の電車に乗った。それから三十余年の月日が流れ、阿部先生始め、寺澤さん、斉藤さん、水上さん、古賀さん、他、大勢の鬼籍入りがあったが、新しい歌友と共々、力を併せて大海原へ漕ぎ出したいものである。

太陽の舟の長い航路

志賀　倭子

太陽の舟も齢（よわい）を重ねて12月号で三〇〇号となる。昭和52年に阿部正路先生が創設され長い創刊準備号を経て現在の月刊誌に至るまで、太陽の舟も人生と同じで決して平坦な航程では無かった。岸田寛先生の急逝で平成9年12月号を以って一旦最終号を出し「ナイル」と合併して、一時期寄り道をした時代があった。

最大の危機は二〇〇号記念号発行直前、主宰阿部正路先生の青天の霹靂の如き御逝去に直面した時、衝撃を受けた会員は、阿部先生の御遺志を継がれた高﨑邦彦先生を代表に選び、結束して第二次太陽の舟を漕ぎ出した。世間では主宰を失った結社が一つ誌名を掲げて長く継続するのは珍しいと言う。然し高﨑代表となり第二次を冠した太陽の舟は、平成18年1月号から第二次を削除、本来の「太陽の舟短歌会」として阿部先生の理想とされた平等の精神の貫かれた短歌結社として現在航行中である。

今回三〇〇号出版と聞き、昭和55年6月号に初投稿の私の拙歌が載った時が甦り、毎月の定例歌会も十一月で三五七回となるので、太陽の舟にはもっと長い歴史があるとの思いもある。歳月の流れは過酷で来るべき三五〇号を私は惚ける事なく健康な心身で手にする事が出来るかしらと、一抹の不安も過ぎる高齢となった。それでも希望はある。阿部正路先生にお会いした事も無い若い会員の増加に期待をし「太陽の舟短歌会」の永遠の航海の安寧を祈念する。

入会の頃と大田支部

庄司　久恵

太陽の舟創刊三百号記念号。

あなたは、平成二十一年十二月号で二十五歳。（三百割十二ヶ月）充実した輝かしい青春時代ですね。生みの親である阿部先生他、数人の下で生れ、会員の皆さま方の愛と努力

を受けて成長し、立派になられました。誌名が変ったり、阿部先生を始め、会員の方々も亡くなられたり、悲しいこともありましたが、生前の楽しい大会の旅行の思い出なども誌上に残り、新会員の方達も力一杯舟を漕いでくださるので、太陽の舟は人数も増えて力強く運行し、ページ数も増え、会員ひとりひとりの喜び、悲しみ、想いの溢れた歌達が、懐かしく静かに息ずいている三百冊です。

私が入会し、初めて短歌が誌上に載ったのは、「創立準備三十八号と表記があり、昭和六十年一月一日発行と記されています。創刊は昭和五十三年六月一日ですから、創刊号より六年半後となります。入会した時のことが今もはっきりと蘇ってまいります。昭和五十九年の秋の日曜日のミサの帰途、初めて同行した聖歌隊でご一緒の小林りょう様が、「午后は歌会で……」と仰言ったひと言で、私は短歌会の入会を決めたのです。街路樹の黄色の葉が降りしきっていました。私は終戦後十歳代の終りから二十歳代にかけて短歌会に入会し、指導を受けていました。上京結婚後は続かなくなり止めて了い。紹介して頂き入会しても私に合わなく続きませんでした。太陽の舟は、どんな短歌会か予備知識もなく入会しましたが私の望んでいた会でした。先ず主宰の阿部先生はすばらしい方でした。卓抜な博識と、温かい気持の優しい人柄で出詠歌の心の襞の中まで理解し、汲みとってくださり、ユーモアもあり明るいので、私は心酔して了いました。本部歌会は楽しく学び心満たされる会でした。大田支部会にも年に一度来て頂き、歌会の後、夕食を共にさせて頂きました。有意義な一日でした。歌人会の方々も皆親切でよい人達ばかりでした。

大田支部会は、小林りょう様宅で開催されていました。出席者は十数人で、吉田操様・川村様・岸良様の三人がご指導くださっていました。充実した楽しい会でよい勉強をさせて頂きました。小林様指導のコーラスの方達が半数を占めており和やかな支部会でした。長沼さんはもう入会していらっしゃって、私の入会とほとんど同じ頃、浅見様と山名様が入会され、三人は都野様の通信歌会「風信」にも入会しご指導を受けておりました。小林様が病気になられ、支部会会場が池上本門寺の会館に変り、数年後に改築とのことで現在の大森山王高齢者センターになり長く続いております。吉田様は亡くなり、岸良さまも引越され、川村様を中心に新しくなった会員の方々と勉強しております。昨年より三木先生に来て頂き、益々充実してまいりました。百四歳の渥美様は出席はなくなりましたが、七首は毎月送られてきます。支部の誇りと思います。あやかりたいものです。「創立宣言」を何時も心に刻み、太陽の舟短歌会の会員として歌を信じて人間存在の意味を問い続け珠玉の作品を生み続けてゆきたい。

歌を言葉の炎として

末次　房江

阿部先生のご逝去という悲しみに満ちた記念号二百号から

早くも三百号を迎えることになった。
高崎代表をはじめ歌友の協力・結束のたまものと思う。素晴らしいことだ。歌になづみつつ、やっと船にのり続けているような時でも『太陽の舟』はずっと続いて欲しいと思っている。
「深海に生きる魚族のやうに、自らが燃えなければ何処にも光はない」
若くして癩で死んだ歌人・明石海人が唯一の歌集「白描」の前文に書いた言葉です。自信を失い心が弱くなると、いつもこの言葉を思い出し自分を鼓舞しています。映画監督の大島渚氏もこの言葉を後生大事に何十年も抱きしめて来たと言っています。
これからの人生、いろいろ厳しい状況があるかも知れません。歌を言葉の炎として灯し続けて行きたいと思います。それが人生を導く光ともなってくれるでしょう。
ひとり一人の灯す炎が万灯のように美しい『太陽の舟』が進んでゆく姿が見えるような気がします。大きい炎も小さい炎も一生懸命灯り続けて……

「アベチャンアベチャン」の声夢のよう

多久和玲子

「これから夜の会合に行って来ます」と手を振りながら街角に消えてゆかれた阿部先生が、まさか翌日亡くなられるとは今でも夢のようです。
私が才能もないのに短歌に没頭してしまうなんてと思うとやはり阿部先生との出会いかなぁと思う昨今である。そして国漢の教師だった父の引き合わせかとも思うのです。
昭和三十五年春、夫の任地北海道より帰ったとき、町会の人から「素晴らしい先生がいらっしゃるから同好会を作ります。仲間に入りませんか」とお誘いがあったのです。
その頃阿部先生二十代で独身、情熱を持って主婦たちを厳しく御指導して下さったのです。そして柏でプロレタリア歌人として有名だった館山一子師、松本千代二師（地平線）も紹介して下さったのです。
館山師の「アベチャン、アベチャン」の声が今も聞こえるようです。御二人が亡くなられた後で、太陽の舟に参加させていただきました。誌上では平成三年の秋からです。
近所だった阿部先生には家族ぐるみのお付き合いをさせていただき平成七年に第一歌集を出させていただき感謝しております。
今年の桜の見事さは、創立宣言にある阿部先生の理想を受け継ぎ努力されて三百号を達成された、高崎先生はじめ同人の方々に笑顔を見せて下さったのだと思いたいのです。
そして結束が深まる『太陽の舟』を喜んで下さっていると涙が出ます。益々の後生に向けての発展を祈りたいと思います。

どこかさ迷う一舟みたいな

玉川　愛子

太陽の舟への入会のきっかけとなった読売文化センターで初めて阿部先生にお会いしたのは、思えば私の好きな秋でした。あれから長い歳月が流れましたが、過ぎ去れば一瞬の如くにも思えます。当時先生の云われた「心の日記を書くつもりで歌を…」の言葉は、今も未熟な私の中で生きています。

太陽の舟が創刊三百号を達成されたことは、この舟の片隅にひっそりと乗せてもらっている私には感無量です。多くの優れた先輩歌人の方々、豊かな感性や個性の方々と出会える得がたい場でもあります。健康上の理由で遠方の歌会に出られぬ私には、支部の歌会とその歌友との折々の出会いは大切なものです。

各々が人生の重荷を負いつつもエネルギッシュでひたむきに生きておられ、その空気にいつも励まされます。先日の歌会の帰りに駅までの道を、先輩の方々を先頭にゆっくり歩調を合わせている時、誰か「葬列みたいね」と云ったのを聞き、云い得て妙、と思いました。周りを行く街人達は皆足早にすぎ追い越してゆく中を、ゆっくりマイペースで、賑やかな少し老いた集団が歩む様子は、どこかさ迷う一舟みたいな、それでいて個々人は明確で、少し哀しくて明るいこんな葬列もいいなと思ったものです。

運営面での御苦労を負って下さる方々に感謝しつつ、これからのこの舟の旅路が豊かであります様に祈ります。

わたしの想い出　寺沢八重子さん

月田　藤枝

「寺沢さ～ん」と呼べば播州なまりの少し残った明るい声で「何や」と言い乍ら出て来られる様な気がします。歌心も言葉も何も知らない私を短歌大好き人間に育てて下さったのは寺沢さん以外には無い様に思います。寺沢さんは素晴らしい才能と信念を持ち合わせておられる方でした。常に短歌に対する情念を秘めておられ短歌のために生きて来られた方の様に思えました。未熟でなまけもの、私は忙しいからとか変な理由をつけては歌が間に合わなかったりすると「又私を困らせる」とまるで妹を叱る様にそして又一寸おだてたりし乍ら私に意欲を持たせて下さったりしたこと幾度。阿部先生御存命の頃寺沢さんのことを「南国に咲く向日葵の様に明るく豪放に見えて緻密そして情の厚い人」と評しておられました。其の寺沢さんが非常に治りにくいと云われるリューマチに侵され長い闘病生活に入られてしまいました。とうとう平成十七年に八十五才でお亡くなりになりました。此の喪失感は太陽の舟共々私の胸中から離れることはないでしょう。寺沢さんほんとうに有難う。

想い出の歌三首〈花〉

・八重桜八重子の庭に繚乱と花天蓋に藍空深し

・黒き樹皮ひぞれる桜老幹の身力しぼり一身に咲く
・散るものは散りてゆくなり年々に花に訣るる憶ひは深む

伊藤英一様の闘い

土屋　道子

「太陽の舟」の創設者阿部正路先生在りし日の話です。

「国学院オープンカレッジの私の講座に来ている人の中に立派な人が居るのですよ。阿部先生の講義を伺うのに電車などに乗って行っては申し訳ないと云って、文京区の自宅から歩いてくるそうです。」それが伊藤英一様だったのです。

伊藤様の一番の大仕事はその後のことです。海外旅行から帰られる奥様を、成田空港まで出迎えたのですが、いつまで経っても降りて来られず、最後に担架で降りて来たのが奥様だったそうです。併し国際空港だと云うのに確立した医療施設が無く、すぐ救急車の手配をしたそうですが直ぐには来ず、結局病院で最期を迎えられたという事でした。平成四年十一月二十八日の事でした。エコノミッククラス症候群だったそうです。

伊藤様は大きな悲しみの中で「あの空港には是非とも良い診療所を作って貰いたい」と考え、署名運動を始めたのです。そして関係のある役所にもお願いして廻ったそうです。前から入会していた明治大学考古学博物館友の会の方達も皆さん協力して下さり、伊藤様の願いは適って平成九年四月、立派な診療所が出来たのです。普通の人には出来ない大仕事を伊藤様は悲しみの中でなさったのです。

「太陽の舟」入会はその頃でした。とても喜ばれた阿部先生も亡き人となりましたが、尊敬する高崎先生の許で、恵まれない人達に目を向けて、温かい心で良い歌を作り続けていらっしゃいます。

生きる指針

照山　好子

『太陽の舟』にお世話になって何年になるだろうか。普段あまり考えてみることもないので、この機会に振り返ってみた。平成十一年の入会である。早くも十年が経った。まだ五、六年ぐらいでは、といつまでも呑気に構えていられない。

入会する一年前「初心者のための短歌講座」を「市政だより」で知り、応募した。その時の講師が高崎代表であった。講座終了と同時に、受講した二名を除く四名が『太陽の舟』に入会した。私の他、岡部千代松さん、村田孝子さん、上田やい子さんだ。今も良きライバルであり、かけがえのない友人だ。

『太陽の舟』二〇〇号記念号に掲載の故吉田みさを様の「太陽の舟とともに」を改めて読ませて頂いた。

財政難から、封筒を問屋まで出掛けて購入したこと。会員住所は手書き。雑誌を手押し車で郵便局に持参したこと等。草創期の、今では想像もできないようなご苦労のあったこと

を痛感させられた。
迎える三百号は、先人達のご苦労を引き継ぎ、高崎代表のもと、同人一同が一丸となって育み、そして勝ち得た賜と思う。心から喜び祝福したい気持ちでいっぱいだ。
生きる上の指針である短歌を『太陽の舟』とともに、これからも続けて行きたい。

祝、三百号

豊島　英明

「太陽の舟」創刊三百号。心から嬉しく思います。今まで休まず発行され続けた事に敬服すると共に、「太陽の舟」の運営・経理に携わって下さった髙﨑先生、三木先生、松岡様、北川様、森様、並びに各支部長の皆さまに深く感謝申し上げます。
「太陽の舟」の一員として、私が今まで細々と続けてこられたのも、苦しいのは自分だけではない、皆様も同じような気持ちで頑張っておられるという思いからです。この場を借りて、全ての会員の皆様にお礼の言葉を述べさせていただきたいと思います。
留学時代、短歌を通し自分自身と向き合い、内面を見つめる訓練をすることができました。結果、苦しい外国生活を乗り越えることができました。恩師より、「日本語力と英語力は比例しており、日本語力を磨けば英語力も上達する、日本語を磨くには短歌が一番良い方法である。」という教えを受けました。短歌を続けることで、物事の本質を見分ける力がついてきたように思います。今後も精進を重ね、短歌の質を向上させて行きたいと思います。引き続き、ご指導を宜しくお願い申し上げます。
最後に「太陽の舟」の更なる三百五十号四百号へ発行と発展を願っております。

感動の積み重ね

冨永　道子

それは、つくばエキスプレス開通の春のことでした。本部歌会出席の柏支部の輪に、「筑波山のカタクリ見に行かない？」と、まあるい声で呼びかけてくれた歌人がありました。キラキラ輝く瞳と出合った途端、「ご一緒させて下さい」と、応えた私は、初めてお目にかかった人なのに、不思議な引力のようなものを感じたのでした。
大変にご多忙な人とも知らず、遠回りの取手からのドライブへと変更を願った旅でしたが、昔から知り合いだったような、不思議な不思議な感覚に包まれて、言い知れぬ満足感に満ちた、時の流れが止まってしまったような、夢の中にいるような一日でした。
夫を亡くして一年にも充たない私の、泣き笑いの愚痴の聞き役に徹して下さったその歌人こそ、山名恒子大先輩でした。
麓の嬢歌の里では、通りがかった地元の人が詳しく説明し

てくれましたが、夏のつくば全国大会で、また訪れることが出来ました。

このように、在籍しているからこその感動の積み重ねが、潤いをもたらせてくれます。

３００号の刊行に、居合わせたこと、素晴しい歌人達を手本とさせていただけることに感謝して、詠草を続けたいと思います。

良い歌の条件

長須　正文

歌会に出席して作品の批評を求められ戸惑う経験をもつ人は多い。小生もたびたび言葉に詰ったり、作者の感情を害したり、的外れの内容だったり…の失敗を繰り返している。

そこで、最近絶対これなら作者の感情を害し、会員の不評を買うことはない―ない筈であるというポイント二つを自分自身に課している。

そのひとつは「主題のあいまいさ」ということである。歌は文学、ことばによる創造の文芸作品である以上、そこに作者の創造の意図、中心、狙い、いわゆる主題がなければ人を感動させることができない。したがって、主題のはっきりしないものは良い歌とは言えない。

次にもうひとつ。短歌というジャンルは抒情詩であるということ。この叙情性を失った説明、理論、単なる散文であっては短歌とは言えない。最近の短歌はどうかすると散文化し、口語化し、ことば遊び化していて感動に乏しいような気がしてならない。わが「太陽の舟」の月々の詠草はどうであろうか。

短歌作品の良し悪しを論ずる評価の観点としてその他定型、音律、用字用語、表記、素材などあろうが、小生としては特に以上の二点を最も重要としている。そしてこれらは作歌の立場からも大切なポイントなのである。

「太陽の舟」を漕ぎつづける

深谷　充代

私と短歌との出会いは、昭和六十年一月、姑の代わりに歌の集いに出掛けた事がきっかけで、すでに二十七年になります。

初めは何をどう詠んでよいのか分からず、五七五七七に納まらない言葉を持ち歩いていたことを思い出します。緊張しつつ加藤美恵子先生に添削して貰い、語句の扱いなど一つ一つ教えていただき勉強して参りました。加藤先生亡き後は長須正文先生にご指導を仰ぎながら休詠することなく現在に至っております。今では作歌の時間は唯一私のほっとする刻でもあり、家族の者に短歌の集まりと胸を張って会に出ております。

先日、水戸支部の歌会で髙﨑邦彦先生が阿部正路先生の「短歌のすすめ」を講義され「歌人には、素人も玄人もありません。常に素人であることを自覚している歌人こそ真の歌人と

いえましょう。むしろ玄人と呼ばれている専門歌人ほどつまらない歌人である場合が多いのです。」と言われ改めて阿部先生の偉大さを認識いたしました。そして、阿部先生を水戸支部にお迎えした時にきびしくお叱りいただいたことなど懐かしく思い出しております。

こうして今日まで年を重ね、年齢は高くなりましたが、微力ながらも歌を詠み続け、今後ともこの「太陽の舟」を漕ぎ続けたいと願って止みません。

林田晴子（水上怜子）さんの辞世歌

松本　啓子

・花も見つ若葉に萌える天地（あめつち）のもなかに帰る時は来にけり

二年前に亡くなられた品川支部林田晴子さんの辞世歌です。「太陽の舟」前期に活躍、阿部先生に期待された林田さん。宿痾のため一時退会、辛い闘病中、舟に戻りたいと願われ、高崎先生も待っていて下さったのに、残念な思いです。

三木先生もこの辞世歌に感銘され、品川シーサイドで繰り返し語られました。

昭和十八年神宮外苑で激しい雨の中、学徒出陣壮行会の写真は夫君の林田カメラマン撮影です。その同じ時

・生きてまた逢ふを期せざるつはものを送るゆくてに月明くのぼる　林田晴子作　昭和万葉集　秀歌より

この歌を私は没後、友に聞きはじめて知ったのです。晴子さんは自分史にとらわれない、人に頼らない生き方をして来られた方です。そして文学を短歌をこよなく愛した方でした。従容と天地のもなかに帰る歌も出来たのでしょう。『夭折者は炎のように赤く輝き、老人は銀の重さをもって白く充たされる。生き残って死者の傷みを理解出来る人によってのみ未来は開かれる』須藤氏の阿部正路論8月号より

阿部先生の言葉は貴重です。太陽の舟３００号中、どの一冊を抜き出しても、亡き阿部先生と先達の短歌、思い、言葉がびっしりと充実しています。過去も現在も「太陽の舟」は一つ家族です。銀の重さが身につきますように。

短歌と私

宮原喜美子

人生の中には、自分が選んで生きてきたと思う部分と、そうでない部分があって、後者には、この世に生まれてきたことの外に、何かの必然かそうでないのか、自分がいつの間にかそうしている、というものがある様に思えます。

私にとって短歌とは、そういうものの一つで、人生の中の幾つかの点と点が繋がって、太陽の舟短歌会に参加させていただいています。

毎月届く本の中の多くの方々の歌に、感性の魔法にかかった世界を見つけて、深い感動を覚えます。

自分では、小さな感動さがしに心を砕いているのですが、

例え見つかったとしても、表現に相応しい言葉さがしに数日を費やしてしまいます。

家事や仕事を脇に置いて机に向かう時、学生の頃のように、学びたい自分、考える自分、そして考えることを楽しんでいる自分を見つけて、短歌がますます好きになっています。

黄砂の風に吹かれて

山田　紀子

前略　先生。三百号を祝して旅行中の中国からお便りします。今朝、バスで北京を発ち、昼すぎに山西省大同に着きました。九月下旬だというのに太陽は夏のように輝き、雨の少ないと言われている山西省の大地はますます乾ききっていました。大同市は北魏の都だった処ですが、炭鉱があり、炭塵と黄砂とで街全体が埃っぽい感じです。早速、郊外にある世界遺産の雲崗（うんこう）石窟を見学。石窟は五世紀中頃から彫られ、インドからシルクロードを経て伝わった仏教文化が開花した所で、雄大さと芸術性に圧倒されました。

バスは又、高速道路をひた走ります。車窓には乾いた大地に植林されたポプラと唐黍畑が代わるがわる現われ、それらが視界の果てまで続いているのです。

短歌を始めてまもなく、私は宮柊二の歌集『山西省』を読み、大変な衝撃を受けたのです。以来、山西省はいつか必ず行ってみたい所として心に温めてきました。それから十年余りが過ぎた今、山西省の空の下で山を眺め、風の音を聴き、地元の人と挨拶をかわしています。

少しまどろんでいたら、クラクションのけたたましい音で目が覚めました。いつの間にかバスは高速道路を下りて県道を走っています。道の真ん中を一台のロバ車が走っていて、なかなか道を譲ろうとしません。その姿はまるで、「追い越したいなら、追い越して行け、俺は日暮れまで家に着けばいいんだ」と、言っているようでした。ロバは唐黍を山と積んだ荷車を、首を振りふり曳いています。その時、何故か私は胸を突かれる思いがしました。

「人間に代りて重き荷を曳けり翼かくして驢馬たちはゆく」

阿部先生の歌集『天山離離』の嘻矢の一首を思い出して、わけもなく目頭が熱くなってきたのです。

明日は太原へ向かいます。どんな出会いがあるのか楽しみです。夜がふけてきました。また便りをします。　かしこ

黄河を渡って

前略　先生。二信です。昨日の夕方、黄河を渡り河南省洛陽に着きました。ラッシュに遭い、バスはなかなか進みません。通訳兼ガイドが「漢魏洛陽故城の城壁です」と、外を指さしました。約二千年前の城壁は一部だけ残っていて、高い土手に草や木が生い茂っているだけでした。貴重な文化財なのに、と思いますが、致し方ありません。昔、後漢の光武帝から「漢倭奴国王」の金印を受けた使者や邪馬台国の卑弥呼

の使者も洛陽の都大路を歩いた筈。蛇足ですが、芥川龍之介の小説「杜子春」の舞台は唐の時代の洛陽城で、今の王城公園や洛陽博物館の建っている辺りに移ったそうです。

今朝、ホテルの二十一階の部屋から見た街は深い霧に包まれていました。郊外の竜門石窟へ向かう途中、建築中の高層アパート群が霧の中に林立しているのにはびっくりでした。九つの王朝が都とした洛陽は、今は有数の工業都市になっています。竜門石窟は世界遺産となり、水洗トイレも完備され見学し易くなっていました。唐の女帝、則天武后をモデルにしたと言われる盧舎那大仏は、美しく威厳に満ちていますが、露座のためか額から鼻先に雨の痕が幾筋も残り、慈悲の御顔に凄みを感じてしまいました。石窟の前をゆったり流れる河を、通訳の青年は説明してくれます。「伊豆の伊とさんずいの河で伊河と言います。対岸の山は香山と言い、白楽天が隠棲した香山寺が見えます」

霧が晴れ、香山の緑が美しく目に写りました。盧舎那大仏と石窟に彫られた十一万余りの仏像は伊河の流れと香山と移りゆく世界を見続けるのでしょう。

明日は安陽へ向かう予定です。旅も半分終わり、後半に入ります。まだまだ黄砂の風に吹かれていたいのですが、そうもいきません。いずれまた、便りをします。入港した三百号が再び新しい水平線に向って出航されることを中国の空の下で願いながら。

かしこ

面白や・・

山名　恒子

「太陽の舟」を開くと、まず創立宣言が目に入る。何度読んでも良い文章だと思う。阿部先生が亡くなられて久しいのに、太陽の舟に集う人たちは、阿部先生の心を我が心として日々を励んでおられる。横着者の私でさえ時に読み返して弱い心を叱咤激励する。叱咤激励はするが、省みて己の及ばないことに萎えそうになる。

創立宣言には、現実に立脚するとは現代を徹底して生きぬくことを意味する、とある。徹底して生きぬくとはどういうこと？と怠け者の私は怖気づく。嬉しいこと、面白いこと、楽しいことは大好きだが、努力すること、己を律することは大変に辛い。残り少ない人生だと思えば尚更、何ぞ愉しまざらんやと思ってしまう。真剣に生きて珠玉の作品を生みつづけておられる方々に付いて行けない。

ますます萎えていく時、能の「江口」の文句、六塵の境に迷ひ六根の罪を作る事も見る事聞く事に迷ふ心なるべし面白や、と聞こえてきた。

私の萎える心もまた面白や・・か？

楽をしたがる心、日常に流されてよしとする心、見ること聞くことに迷う心、そこに歌の種をみつけて詠むことが、面白や・・ならば、萎えつつも歌作りを続けることが出来るかもしれない。希望が持てるかもしれない、と思った。

太陽の舟の水夫となりて

吉田　昌夫

人にはそれぞれ出会いがある。

短歌をやりませんか、と声をかけてきたのは、詩吟クラブで隣り合わせた松岡さんであった。短詩型文芸に興味はあったものの短歌も俳句も川柳もやったことはない。短歌ですか？　と言っているうちに大樹会（わが町の老人会）に七人の仲間で短歌会を立ち上げることが決まった。松岡さんが編集人をしている「太陽の舟」の会員にもなった。平成十七年九月のことである。今年九月塩見岳で急逝した藤井武徳さんも加わった。人と出会い短歌と出会った。

短歌を始めて今までぼんやりと見てきた自然の姿が違って見えてきた。風景が起立してきた。秋の銀杏の黄金色の葉がはらはら落ちていく姿に感動している自分を知った。歌をとおして自分のこころも見定めるようになってきた。

五木寛之は人生を「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」と分けるインドの考えを紹介する。私はもう自分自身を見つめ直す林住期から、死を迎える準備をする遊行期に入るところであるが、例えば散歩のときなど愛犬を友に周囲の景色を眺めながら短歌を詠んでいきたい。

「太陽の舟」は三百号という。始めてまだ四年の私など先達諸氏にはおよびもつかぬが、千葉例会などに出て

「太陽のひっそり沈む秋の暮れ浄土ゆめ見つつ老い一人佇つ」などと詠んで自分を見詰めている。

思うこと

鈴木　熹子

平成十二年四月敬愛学園高校の生涯学習の短歌講座に参加したことから太陽の舟に乗せていただきました。

三十一文字にその日その時の思いを詠みながら生きてきました。短歌を詠むことで自分を支えています。

歌集『木漏れ日の道』を出して多くのひとに励まされ、三年の闘病生活を乗り越え今生きている実感に浸っています。病室のベッドの傍にノートと鉛筆がありました。指の力の抜けた文字はまだ読み返してはいませんが、短歌のつもりでした。生きていることをどのように表現したら良いのでしょう。ただ永らえばいいということではないしと思ってもみたり悩んでも見たり。

長寿がニュースになる社会で生きるとはどういうことか。病後の私は問い続けています。豊かなる揺るぎない死生観を築くために短歌を詠み続けていきたい。太陽の舟に乗り合わせ歌友やその歌に励まされ生きている自分を仕合わせと思っています。

今朝、「太陽の舟プログを開いた」という同郷の人から電話を戴いた。図書館で『木漏れ日の道』を読んで私を捜しあてたとのこと、驚きました。同時にインターネットという新しい海に太陽の舟が漕ぎだしたことを思い時代を感じました。三百号、快哉を叫びたい思いです。

太陽の舟年表

松岡三夫
山田紀子

㋐論文　㋑評論　㋒歌評
㋓随筆　㋔日記紀行文等
㋕追悼文

年次	主要事項（歌会等）	論文　評論　歌評　随筆　日記・紀行文等	記録・その他
平成十七年（二〇〇五年）［二五一号～二五二号］　第27巻年集			
11月1日	第27巻11月号（通巻251号）上梓	◆251号内容	・主宰　故阿部　正路
11月12日	本部歌会11月例会（第313回）	巻頭言　髙﨑　邦彦	・代表　髙﨑　邦彦
11月4日	水戸支部歌会	二十五首詠「顧みて」　原武　寿子	・編集人　松岡　三夫
11月12日	渋谷支部歌会	㋐阿部正路論（第49回）　須藤　宏明	・四十八頁
11月13日	水戸支部歌会	㋒歌誌散見（第26回）　豊泉　豊	・出詠者　118名
11月18日	柏支部歌会	㋒九月号批評（作品Ⅰ）　中村　陽子	・誌代　500円
11月24日	千葉支部歌会	（作品Ⅱ）　佐伯　朋子	・上梓所
11月26日	大田支部歌会	㋒秀歌抜芳　髙﨑　邦彦	〒145―0063
11月28日		㋒合　評　伊藤モト・木村恵美子・相羽照代・木村百合子	大田区南千束1―72―4
		㋒作歌の目作歌の技法（第10回）　三木　勝	庄司　久恵方
		㋓歌帖余白（第23回）　松岡　三夫	☎03―3729―2658
		第七回全国大会報告　志賀　倭子	印刷所
		全国大会入賞者十首	㈲三晃社
		全国大会記念詠草	茂原市長尾2694―147
			☎0475―23―8257
12月1日	第27巻第12月号（通巻252号）上梓		
12月10日	本部歌会12月例会（第314回）		
12月8日	水戸支部歌会		
12月10日	渋谷支部歌会		
12月11日	水戸支部歌会		
12月15日	品川支部歌会		
		◆252号内容	
		巻頭言　髙﨑　邦彦	
		二十五首詠「杉とその連想」　塩田　秋子	
		㋐阿部正路論（第50回）　須藤　宏明	
		㋒歌誌散見（第27回）　豊泉　豊	
		㋒十月号批評（作品Ⅰ）中村　陽子　（作品Ⅱ）佐伯　朋子	

12月16日	柏支部歌会	㋒合　評　長沼温代・河口礼子・田久保洋子・金子ふみ子	・42頁
12月26日	大田支部歌会	㋒秀歌抜芳　高﨑　邦彦	を除いては前月と変更なし
		㋒作歌の目作歌の技法（第11回）　三木　勝	
		㋓歌帖余白（第24回）　松岡　三夫	
1月1日	第28巻1月号（通巻253号）上梓	◆253号内容	・主宰　故阿部　正路
1月8日	水戸支部歌会	巻頭言（264号まで）　高﨑　邦彦	・代表　高﨑　邦彦
1月19日	水戸支部歌会	㋓年頭随想「百年を生きて」　渥美　崇子	・編集人　松岡　三夫
1月19日	品川支部歌会	「短歌と世相」　佐田　孝義	・会計　北川　昭
1月20日	柏支部歌会	二十五首詠「富士の四季」　大久保誠二	・上梓所　庄司久恵方
1月23日	大田支部歌会	㋐阿部正路論（第51回）264号まで　須藤　宏明	・印刷所　㈲三晃社
1月28日	本部歌会、新年会	㋒歌誌散見（第28回）264号まで　豊泉　豊	それぞれ12月号まで変更なし
	東京弥生会館	㋒11月号批評（作品Ⅰ）　杉山　榮子	・42頁
	高得点者	（作品Ⅱ）　永谷　茂	・出詠者　118名
	第1位　末次　房江	㋒合　評　深谷充代・江面伸子・丸山孝一郎・中村陽子	
	第2位　鶴来けい子	㋒秀歌抜芳（第251号）264号まで　高﨑　邦彦	
	第3位　佐伯　朋子	㋒作歌の目作歌の技法（第12回）264号まで　三木　勝	
	〃　田久保洋子	㋓歌帖余白（第25回）264号まで　松岡　三夫	
	〃　金子ふみ子	・太陽の舟執筆者年間計画併せて原稿依頼	
		・新年会・懇親会の案内	
2月1日	第28巻2月号（通巻254号）上梓	◆254号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略）	・38頁
2月11日	本部歌会2月例会（第316回）	巻頭言　高﨑　邦彦	・出詠者108名
2月9日	水戸支部歌会	二十五首詠「吾が想い出」　善波　一江	
2月11日	渋谷支部歌会	㋒12月号批評（作品Ⅰ）　杉山　榮子	
2月12日	水戸支部歌会	（作品Ⅱ）　永谷　茂	
2月16日	品川支部歌会	㋒合　評　久保田昭江・谷河ひさ・田中陽子・角田順子	
2月17日	柏支部歌会		

2月25日	柏支部歌会	
2月27日	千葉支部歌会	
	大田支部歌会	
3月1日	第28巻3月号（通巻255号）上梓	
3月11日	本部歌会例会（第317回）	
3月11日	澁谷支部歌会	
3月12日	水戸支部歌会	
3月16日	水戸支部歌会	
3月16日	品川支部歌会	
3月17日	柏支部歌会	
3月25日	千葉支部歌会	
3月26日	大田支部歌会	
4月1日	第28巻4月号（通巻256号）上梓	
4月8日	本部歌会例会（第318回）	
4月8日	渋谷支部歌会	
4月9日	水戸支部歌会	
4月20日	水戸支部歌会	
4月20日	品川支部歌会	
4月21日	柏支部歌会	
4月22日	千葉支部歌会	
4月24日	大田支部歌会	
5月1日	第28巻5月号（通巻257号）上梓	
5月13日	本部歌会例会（第319回）	
5月13日	渋谷支部歌会	
5月14日	水戸支部歌会	
5月18日	水戸支部歌会	
5月16日	品川支部歌会	
5月22日	大田支部歌会	

	㋕訃報　一壷庵（本名中室水穂）　岐阜支部	
	◆255号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「荘川桜と湖水の汀に」　二反田　實 ㋒一月号批評（作品Ⅰ）　杉山　榮子 （作品Ⅱ）　永谷　茂 ㋒合　評　永谷京子・土橋茂徳・二反田實・生稲　進 ・特集『現代秀歌二〇〇五』 書評　松岡三夫・川村貴美・小守谷うた子・金子泰太郎・長須正文・奥田清・山名恒子・伊藤英一・宮井富美・月田藤枝・庄司久恵・村田孝子・石塚立子・武田節子・深谷幸子・宮原喜美子	・50頁 ・出詠者105名
	◆256号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「迷ひ路の日々」　鶴来けい子 ㋒二月号批評（作品Ⅰ）　岩橋千代子 （作品Ⅱ）　手塚ミッエ ㋒合　評　生稲進・飯塚裕子・浅見時子・庄司久恵	・38頁 ・出詠者110名
	◆257号内容（同一執筆者による年間連載は省略） 二十五首詠「しがらみ」　狐塚　秀子 ㋒三月号批評（作品Ⅰ）　岩橋千代子 （作品Ⅱ）　北林　和子 ㋒合　評　上田やい子・宮入一枝・生稲進・岡部千代松	・40頁 ・出詠者112名

5月26日	千葉支部歌会		
5月26日	大磯支部歌会		
5月26日	柏支部歌会		
6月1日	第28巻6月号（通巻258号）上梓	◆258号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略）	
6月10日	本部歌会例会（第320回）	二十五首詠「征きしまま」　宮島マツヱ	
6月10日	渋谷支部歌会	㋮四月号批評（作品Ⅰ）　岩橋千代子	
6月11日	水戸支部歌会	（作品Ⅱ）　手塚ミツヱ	
6月15日	水戸支部歌会	㋮合　評　須澤渓子・原武寿子・山田玲子・松本啓子	
6月15日	品川支部歌会	・第8回太陽の舟夏季大会案内	
6月23日	柏支部歌会		
6月24日	千葉支部歌会		
6月26日	大田支部歌会		
7月1日	第28巻7月号（通巻259号）上梓	◆259号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略）	・40頁
7月8日	本部歌会例会（第321回）	二十五首詠「父の写生帖」　松本　啓子	・出詠者94名
7月9日	水戸支部歌会	㋮五月号批評（作品Ⅰ）　武田　節子	
7月20日	水戸支部歌会	（作品Ⅱ）　石塚　立子	
7月20日	品川支部歌会	㋮合　評　二宮フサ江・松木昭子・梶川喜與志・二反田實	
7月22日	千葉支部歌会	・全国大会へのお誘い　佐田　孝義	
7月24日	大田支部歌会		
7月28日	柏支部歌会		
8月1日	第28巻8月号（通巻260号）上梓	◆260号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略）	・40頁
8月17日	水戸支部歌会	二十五首詠「友よ目覚めよ」　加藤かず子	・出詠者106名
8月27日	第8回全国大会	㋮六月号批評（作品Ⅰ）　武田　節子	
～	ホテル「リゾートピア」箱根	（作品Ⅱ）　紫野　百代	
8月28日	太陽の舟賞 該当者なし	㋮合　評　吉田昌夫・中村武光・小貫昭・堀井英範	
	功労賞 佐田　孝義	・第8回全国大会詠草60首	
	新人賞 熊谷　香織		
	努力賞 久保田昭江		

	月田　藤枝 宮原喜美子 代表者賞 北川　昭 東京文芸館賞 吉岡悠紀子 選歌の部（高得点者） 第一位 末次　房江 第二位 森田　勝昭 第三位 山田　紀子	
9月1日 9月9日 9月9日 9月10日 9月12日 9月14日 9月15日 9月16日 9月21日 9月25日	第28巻9月号（通巻261号）上梓 本部歌会例会（第322回） 渋谷支部歌会 水戸支部歌会 大磯支部歌会 水戸支部歌会 柏支部歌会 千葉支部歌会 品川支部歌会 大田支部歌会	◆261号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「ランプの宿」　深谷　幸子 ㋒六月号批評（作品Ⅰ）　武田　節子 （作品Ⅱ）　石塚　立子 ウ合　評　佐田孝義・永谷茂・大久保誠二・木村優君
10月1日 10月21日 10月8日 10月19日 10月19日 10月20日 10月21日 10月23日	第28巻10月号（通巻262号）上梓 本部歌会例会（第323回） 水戸支部歌会 水戸支部歌会 品川支部歌会 柏支部歌会 渋谷支部歌会 大田支部歌会	◆262号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「エジプトに太陽の船」　松本　良子 ㋒八月号批評（作品Ⅰ）　小貫　昭 （作品Ⅱ）　吉岡悠紀子 ㋒合　評　二宮フサ江・奥田清・谷河ひさ・木村百合子 ・第八回全国大会報告　佐田　孝義 全国大会表彰者10首詠 佐田孝義・熊谷香織・久保田昭江・月田藤枝・宮原喜美子 北川昭・吉岡悠紀子・末次房江・森田勝昭・山田紀子 ・全国大会記念題詠「峠」「農」109首

・38頁
・出詠者107名

・46頁
・出詠者113名

11月1日	第28巻11月号（通巻263号）上梓	◆263号内容（同一執筆者による同一タイトル年間連載は省略）	
11月11日	本部歌会例会（第324回）	二十五首詠「甲斐・信濃紀行」 丸山孝一郎	・40頁
11月5日	水戸支部歌会	㋐九月号批評（作品Ⅰ） 小貫　昭	・出詠者108名
11月11日	渋谷支部歌会	吉岡悠紀子	
11月16日	水戸支部歌会	（作品Ⅱ）	
11月16日	品川支部歌会	㋑合　評　照山好子・土橋茂徳・深谷充代・鶴来けい子	
11月17日	柏支部歌会		
11月18日	千葉支部歌会		
11月27日	大田支部歌会		
12月1日	第28巻12月号（通巻264号）上梓	◆264号内容	
12月9日	本部歌会例会（第325回）	巻頭言 高﨑　邦彦	
12月3日	水戸支部歌会	二十五首詠「顔施」 斎藤登枝子	
12月9日	渋谷支部歌会	㋐阿部正路論（第62回） 須藤　宏明	・38頁
12月14日	水戸支部歌会	㋑歌誌散見（第39回） 豊泉　豪	・出詠者108名
12月16日	千葉支部歌会	㋒十月号批評（作品Ⅰ） 小貫　昭	
12月19日	大磯支部歌会	（作品Ⅱ） 吉岡悠紀子	
12月21日	品川支部歌会	㋑合　評　宮原喜美子・飯塚裕子・伊藤モト・川村貴美	
12月22日	柏支部歌会	㋑秀歌抜芳（第262号） 髙﨑　邦彦	
12月25日	大田支部歌会	㋑作歌の目作歌の技法（第23回） 三木　勝	
		㋓歌帖余白（第36回） 松岡　三夫	

平成十九年（二〇〇七年）［二六五号～二七八号］　第29巻年集

1月1日	第29巻1月号（通巻265号）上梓	◆265号内容	
1月14日	水戸支部歌会	巻頭言（276号まで） 髙﨑　邦彦	
1月18日	水戸支部歌会	我が愛する歌―名歌鑑賞―（276号まで） 長須　正文	
1月18日	品川支部歌会	㋓年頭随想「隗より始めよう」 長須　正文	
1月19日	柏支部歌会	「私を育んでくれたもの」 玉川　愛子	
1月22日	大田支部歌会	二十五首詠「手文庫回想」 岩橋千代子	
1月27日	本部歌会（第326回）	㋒十一月号批評（作品Ⅰ） 中村　武光	

		ホテルはあといん乃木坂 高得点者 第一位　宮島マツヱ 第二位　浅見　時子 第三位　吉岡悠紀子
2月1日	第29巻2月号（通巻266号）上梓	
2月10日	本部歌会例会（第327回）	
2月11日	水戸支部歌会	
2月15日	水戸支部歌会	
2月16日	柏支部歌会	
2月17日	千葉支部歌会	
2月26日	大田支部歌会	
3月1日	第29巻3月号（通巻267号）上梓	
3月10日	本部歌会例会（第328回）	
3月10日	渋谷支部歌会	
3月15日	水戸支部歌会	
3月15日	品川支部歌会	
3月17日	千葉支部歌会	
3月23日	柏支部歌会	
3月26日	大田支部歌会	

		㋒合　評　（作品Ⅱ）　多久和玲子 井上萬里子・志崎美亀・宮島マツヱ・山名恒子 ㋒秀歌抜芳（第263号）（276号まで）　髙﨑　邦彦 ㋒作歌の目作歌の技法（第24回）（276号まで）　三木　勝 ㋓歌帖余白（第37回）（276号まで）　松岡　三夫 ㋔父　相羽　照代 ・太陽の舟執筆者年間計画併せて原稿依頼 ・新年歌会・懇親会の案内
		◆266号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略） 巻頭言　髙﨑　邦彦 二十五首詠「追憶・母二人」　手塚ミツヱ ㋒十二月号批評（作品Ⅰ）　中村　武光 （作品Ⅱ）　多久和玲子 ㋒合　評　宮井富美・月田藤枝・久保田昭江・吉岡悠紀子 ・会計報告　北川　昭
		◆267号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略） 二十五首詠「悲しき除籍」　冨永　道子 ㋒一月号批評（作品Ⅰ）　中村　武光 （作品Ⅱ）　多久和玲子 ㋒合　評　生稲進・北川昭・金子泰太郎・河野静子 ・特集　土屋道子歌集『道』書評 髙﨑邦彦・末次房江・小守谷うた子・奥田清・志賀倭子・長須正文・河野静子・永谷茂・中村陽子・深谷幸子・佐伯朋子・月田藤枝・山田田鶴子・丸山孝一郎・前田愛子・塚本正子・松本啓子・原田寛・松岡三夫

		・主宰　阿部　正路 ・代表　髙﨑　邦彦 ・編集人　松岡　三夫 ・会計　北川　昭 ・上梓所　庄司久恵方 ・印刷所　三晃社 （それぞれに12月号まで変更なし） ・42頁 ・出詠者106名
		・40頁 ・出詠者109名
		・50頁 ・出詠者106名

4月1日	第29巻4月号（通巻268号）上梓		
4月14日	本部歌会例会（第329回）	◆268号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略）	
4月14日	渋谷支部歌会	二十五首詠「今日までそして明日から」 富原　澄枝	
4月14日	水戸支部歌会	㋒二月号批評（作品Ⅰ） 森本　元昭	
4月8日	水戸支部歌会	（作品Ⅱ） 久保田昭江	
4月12日	品川支部歌会	㋒合　評 堀井英範・照山好子・金子ふみ子・中村武光	
4月19日	岐阜支部歌会		
4月19日	柏支部歌会		
4月20日	千葉支部歌会		
4月21日	大田支部歌会		
4月23日			・38頁 ・出詠者106名
5月1日	第29巻5月号（通巻269号）上梓		
5月12日	本部歌会例会（第330回）	◆269号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略）	
5月8日	柏支部歌会	二十五首詠「旅日記」 長沼　温代	
5月12日	渋谷支部歌会	㋒三月号批評（作品Ⅰ） 森本　元昭	
5月13日	水戸支部歌会	（作品Ⅱ） 久保田昭江	
5月17日	水戸支部歌会	㋒合　評 冨永道子・深谷幸子・多久和玲子・山田田鶴子	
5月17日	品川支部歌会	㋓勝海舟別邸洗足軒跡 月田　藤枝	
5月19日	千葉支部歌会	㋓朝が好き〈心の図書館〉 中村　武光	
5月26日	岐阜支部歌会		
～	吟行会		
5月27日	高原・オハヨウサンホテル		
5月28日	大田支部歌会		
			・40頁 ・出詠者112名
6月1日	第29巻6月号（通巻270号）上梓		
6月9日	本部歌会例会（第331回）	◆270号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略）	
6月9日	渋谷支部歌会	二十五首詠「空白のページ」 須澤　渓子	
6月10日	水戸支部歌会	㋒四月号批評（作品Ⅰ） 森本　元昭	
6月15日	柏支部歌会	（作品Ⅱ） 久保田昭江	
6月16日	千葉支部歌会	㋒合　評 玉川愛子・角田順子・石塚立子・山田紀子	
6月21日	水戸支部歌会	・第九回太陽の舟全国大会案内	
6月21日	品川支部歌会	つくば路への誘い 岩橋千代子	
6月25日	大田支部歌会	長塚節記念館と生家 塩田　秋子	
			・42頁 ・出詠者112名

7月1日	第29巻7月号（通巻271号）上梓	◆271号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略）	
7月14日	本部歌会例会（第332回）	二十五首詠「農は国の基」 緒方　善丸	
7月8日	水戸支部歌会	㋒五月号批評（作品Ⅰ） 河口　礼子	・40頁
7月14日	渋谷支部歌会	（作品Ⅱ） 岡部千代松	・出詠者112名
7月19日	水戸支部歌会	㋒合　評 渡辺幸子・上田やい子・富原澄江・八代陽子	
7月19日	品川支部歌会		
7月20日	柏支部歌会		
7月21日	千葉支部歌会		
7月30日	大田支部歌会		
8月1日	第29巻8月号（通巻272号）上梓	◆272号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略）	
8月9日	水戸支部歌会	二十五首詠「生命　素直に」 谷河　ひさ	
8月16日	渋谷支部歌会	特別二十五首詠「戦争と少女」 河野　静子	・44頁
8月26日～8月27日	第九回全国大会　筑波山ホテル	㋒六月号批評（作品Ⅰ） 河口　礼子	・出詠者111名
	太陽の舟賞 土屋　道子	（作品Ⅱ） 岡部千代松	
	功労賞 志賀　倭子	㋒合　評 野村富久子・木村重夫・森五貴雄・原田寛	
	庄司　久恵	・第九回太陽の舟全国大会詠草62首	
	川村　貴美		
	宮井　富美		
	努力賞 中村　陽子		
	深谷　充代		
	新人賞 二反田　實		
	代表者賞 山田　玲子		
	東京文芸館賞 原武　寿子		
	選歌の部高得点者		
	第一位 丸山孝一郎		
	第二位 小守谷うた子		
	第二位 冨永　道子		
	第二位 福地　啓子		

9月1日	第29巻9月号（通巻273号）上梓	◆273号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略） 二十五首詠「白山の大自然」　北林　和子 ウ七月号批評（作品Ⅰ）　庄司　久恵 （作品Ⅱ）　岡部千代松 ウ合　評　梶川喜與志・森本元昭・佐田孝義・大久保誠二	・38頁 ・出詠者110名
9月8日	本部歌会例会（第333回）		
9月8日	渋谷支部歌会		
9月9日	水戸支部歌会		
9月15日	千葉支部歌会		
9月16日	水戸支部歌会		
9月20日	品川支部歌会		
9月21日	柏支部歌会		
9月22日	大田支部歌会		
10月1日	第29巻10月号（通巻274号）上梓	◆274号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略） 二十五首詠「お社めぐり」　石黒　水覺 ウ八月号批評（作品Ⅰ）　土橋　茂徳 （作品Ⅱ）　伊藤　モト ウ合　評　今井芳枝・杉本弘子・辻本わか子・森田勝昭 ・第九回全国大会報告　鶴来けい子 全国大会表彰者10首詠 土屋道子・志賀倭子・庄司久恵・川村貴美・宮井富美・中村陽子・深谷充代・二反田實・上田やい子・山田玲子・原武寿子・丸山孝一郎・小守谷うた子・冨永道子・福地啓子 ・全国大会記念題詠「戦」「土」110首 ・小林よしい様（水戸支部）訃報	・48頁 ・出詠者109名
10月13日	本部歌会例会（第334回）		
10月13日	渋谷支部歌会		
10月18日	品川支部歌会		
10月19日	柏支部歌会		
10月20日	千葉支部歌会		
10月21日	水戸支部歌会		
10月22日	大田支部歌会		
11月1日	第29巻11月号（通巻275号）上梓	◆275号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略） 二十五首詠「十歳の春」　北川　昭 ウ九月号批評（作品Ⅰ）　土橋　茂徳 （作品Ⅱ）　伊藤　モト ウ合　評　土方澄江・善波一江・永野昌子・二宮フサ江	・38頁 ・出詠者115名
11月10日	本部歌会例会（第335回）		
11月10日	渋谷支部歌会		
11月11日	水戸支部歌会		
11月15日	品川支部歌会		
11月16日	柏支部歌会		
11月17日	千葉支部歌会		
11月18日	水戸支部歌会		
11月26日	大田支部歌会		

12月1日　第29巻12月号（通巻276号）上梓
12月8日　本部歌会例会（第336回）
12月8日　渋谷支部歌会
12月9日　水戸支部歌会
12月13日　大磯支部歌会
12月15日　千葉支部歌会
12月16日　水戸支部歌会
12月20日　品川支部歌会
12月21日　柏支部歌会
12月21日　大田支部歌会

◆276号内容（同一執筆者による同一タイトルの連載は省略）
二十五首詠「僕と君の間」　中村　武光
ウ九月号批評（作品Ⅰ）　土橋　茂徳
（作品Ⅱ）　伊藤　モト
ウ合　評　二反田實・北林和子・木村恵美子・木村百合子
・太陽の舟執筆者年間計画併せて原稿依頼
・新年歌会懇親会の案内
・太陽の舟歌会会則抄（裏表紙に）

・40頁
・出詠者111名

平成二十年（二〇〇八年）［二七七号～二八八号］　第30巻年集

1月1日　第30巻12月号（通巻277号）上梓
1月12日　本部歌会例会（第337回）
1月17日　ホテルはあといん乃木坂（健保会館）
1月18日　品川支部歌会
1月20日　柏支部歌会
　　水戸支部歌会

◆277号内容
ウわが愛する歌―名歌鑑賞―（12月289号まで連載）　川村　貴美
巻頭言（12月288号まで連載）　髙﨑　邦彦
二十五首詠「僕と君の間」　中村　武光
エ年頭随想「結ぶこころを」　奥田　清
「私の歌の中の自然について」　二反田　實
ア阿部正路論（第74回）（12月289号まで連載）　須藤　宏明
ウ歌誌散見（第51回）（12月289号まで連載）　豊泉　豪
ウ十月号批評（作品Ⅰ）　杉山　榮子
（作品Ⅱ）　照山　好子
ウ合　評　多久和玲子・木村重夫・末次房江・村田弘
ウ秀歌抜芳（第275回）（12月289号まで連載）　髙﨑　邦彦
ウ作歌の目作歌の技法（第36回）（12月289号まで連載）　三木　勝
エ歌帖余白（第49回）（12月289号まで連載）　松岡　三夫
エエッセイ漢詩と私　吉田　昌夫

創設者　故　阿部　正路
・代　表　髙﨑　邦彦
・編集人　松岡　三夫
・上梓所　庄司　久恵
・印刷所　三　晃　社
（それぞれ12月号まで変更なし）
・42頁
・出詠者117名

2月1日　第30巻2月号（通巻278号）上梓
2月9日　本部歌会例会（第378回）
2月9日　渋谷支部歌会
2月10日　水戸支部歌会

◆278号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略）
二十五首詠「石見銀山の秋」　多久和玲子
ウ十一月号批評（作品Ⅰ）　杉山　榮子
（作品Ⅱ）　照山　好子

2月15日	柏支部歌会		
2月16日	千葉支部歌会		
2月17日	水戸支部歌会		
2月21日	品川支部歌会		
2月25日	大田支部歌会		
3月1日	第30巻3月号（通巻279号）上梓		
3月8日	本部歌会例会（第339回）		
3月8日	渋谷支部歌会		
3月9日	水戸支部歌会		
3月15日	千葉支部歌会		
3月16日	水戸支部歌会		
3月21日	柏支部歌会		
3月24日	大田支部歌会		
4月1日	第30巻4月号（通巻280号）上梓		
4月1日	本部歌会例会（第340回）		
4月12日	渋谷支部歌会		
4月12日	水戸支部歌会		
4月13日	品川支部歌会		
4月17日	柏支部歌会		
4月18日	千葉支部歌会		
4月19日			
5月1日	第30巻5月号（通巻281号）上梓		
5月10日	本部歌会例会（第341回）		
5月10日	渋谷支部歌会		
5月11日	水戸支部歌会		
5月15日	品川支部歌会		
5月16日	柏支部歌会		
5月17日	千葉支部歌会		
5月18日	水戸支部歌会		
5月26日	大田支部歌会		

	㋒合　評　長須正文・鶴来けい子・塩田秋子・深谷充代 ・連句百韻を巻く「房州主基斉田の里」	・44頁 ・出詠者109名	
	◆279号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「口逝き給ふ」　河口　礼子 ㋒一月号批評（作品Ⅰ）　杉山　榮子 （作品Ⅱ）　照山　好子 ㋒合　評　狐塚秀子・相羽照代・松木昭子・手塚ミッヱ ㋒『木漏れ日の道』書評特集 髙﨑邦彦・三木勝・土屋道子・渡辺幸子・末次房江・久保田昭江・月田藤枝・富原澄枝・原田寛・山名恒子・松岡三夫 ・第十回全国大会のご案内・美濃加茂市案内	・52頁 ・出詠者113名	
	◆280号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「元旦に想ふ」　宮井　富美 ㋒二月号批評（作品Ⅰ）　小林　絢子 （作品Ⅱ）　庄司　久恵 ㋒合　評　井上萬里子・宮島マッヱ・山名恒子・吉田幸雄 ㋓咫尺を追って　相羽　照代 ㋔泥くさい地域性を求めて　奥田　清 ・「太陽の舟短歌会」アンケート報告（一）　中村　武光	・42頁 ・出詠者109名	
	◆281号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「時過ぎて」　渡辺　幸子 ㋒三月号批評（作品Ⅰ）　小林　絢子 （作品Ⅱ）　庄司　久恵 ㋒合　評　松本啓子・須澤渓子・宮井富美・吉岡悠紀子 ㋕追悼　永谷京子氏・大久保誠二氏　永谷　茂・佐田　孝義 ・「太陽の舟短歌会」アンケート報告（二）　中村　武光	・44頁 ・出詠者107名	

6月1日	第30巻6月号（通巻282号）上梓	◆282号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略）
6月8日	水戸支部歌会	二十五首詠「私の生き方」　森本　元昭
6月19日	品川支部歌会	㋒四月号批評（作品Ⅰ）　小林　絢子
6月20日	柏支部歌会	（作品Ⅱ）　庄司　久恵
6月23日	大田支部歌会	㋒合　評　土屋道子・武田節子・佐伯朋子・志賀倭子
6月15日	第十回太陽の舟短歌会全国大会	・特集・長歌
	於美濃加茂・一二三荘	伊藤英一・奥田清・久保田昭江・酒向一次・志賀倭子・末次
	参加者　五三名	房江・須澤渓子・多久和玲子・玉川愛子・谷川ひさ・角田順子・
	出　詠　七〇首	豊島英明・山名恒子・山田田鶴子・吉田幸雄・渡辺幸子
	第一日	・第十回太陽の舟全国大会詠草　於美濃太田
	旧中山道見学・夕食後螢狩り	・「太陽の舟短歌会」アンケートの報告（三）　中村　武光
	第二日　歌会	
	選歌賞	
	第一位　山田　紀子	
	第二位　山口クニ江	
	第二位　石塚　立子	
	第二位　庄司　久恵	
	受賞者	
	太陽の舟賞　鈴木　憙子	
	特別功労賞　奥田　清	
	功労賞　土橋　茂徳	
	特別賞　北林　和子	
	代表者賞　二反田　實	
	努力賞　相羽照代・酒向一次	
	玉川愛子	
	新人賞　深谷　幸子	
	東京文芸館賞　八代　陽子	
7月1日	第30巻7月号（通巻283号）上梓	◆283号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略）
7月12日	本部歌会7月例会（第342回）	二十五首詠「故郷の海」　土方　澄江
7月12日	渋谷支部歌会	㋒五月号批評（作品Ⅰ）　松本　啓子
7月13日	水戸支部歌会	（作品Ⅱ）　梶川喜與志
7月17日	品川支部歌会	㋒合　評　中村陽子・丸山孝一郎・生稲進・前田愛子

・50頁
・出詠者106名

・42頁
・出詠　114名

7月18日	柏支部歌会	
7月19日	千葉支部歌会	
7月20日	水戸支部歌会	
7月28日	大田支部歌会	・「太陽の舟短歌会」アンケートの報告（四）　中村　武光
8月1日	第30巻8月号（通巻284号）上梓	
8月9日	本部歌会8月例会（第343回）	
8月9日	渋谷支部歌会	
8月17日	水戸支部歌会	
8月21日	品川支部歌会	
8月25日	大田支部歌会	◆284号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「はるか海より」　石塚　立子 ウ六月号批評（作品Ⅰ）　松本　啓子 （作品Ⅱ）　梶川喜與志 ウ合　評　塚本正子・山田紀子・松本良子・末次房江 ・第十回太陽の舟全国大会報告　二反田　實 ・全国大会詠「螢」「木曽川」 ・全国大会受賞者十首 鈴木熹子・奥田清・土橋茂徳・北林和子・酒向一次・玉川愛子・深谷幸子・二反田實・八代陽子・山田紀子・山口クニエ・石塚立子
9月1日	第30巻9月号（通巻285号）上梓	
9月13日	本部歌会9月例会（第344回）	
9月13日	渋谷支部歌会	
9月14日	水戸支部歌会	
9月19日	柏支部歌会	
9月20日	千葉支部歌会	
9月21日	品川支部歌会	
9月29日	大田支部歌会	◆285号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「風と」　佐伯　朋子 ウ七月号批評（作品Ⅰ）　松本　啓子 （作品Ⅱ）　梶川喜與志 ウ合　評　多久和玲子・深谷幸子・角田順子・冨永道子 ・書評『炉端』特集 髙﨑邦彦・岩橋千代子・北林和子・木村百合子・久保田昭江・庄司久恵・多久和玲子・土屋道子・照山好子・二反田實・三木勝・山名恒子・松岡三夫
10月1日	第30巻10月号（通巻286号）上梓	
10月11日	本部歌会10月例会（第345回）	
10月11日	渋谷支部歌会	
10月16日	柏支部吟行会（松戸定邸）	
10月16日	品川支部歌会	
10月18日	千葉支部歌会	
10月19日	水戸支部歌会	
10月27日	大田支部歌会	◆285号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「戦後と共に」　富原喜美子 ウ八月号批評（作品Ⅰ）　伊藤　モト （作品Ⅱ）　末次　房江 ウ合　評　渡辺幸子・岡部千代松・堀井英範・村田一江 ・炎暑歌仙・青葉の森・シーサイド

・48頁
・出詠　103名
（全国大会課題詠）
42名　84首
全国大会受賞者詠
12名　120首

・46頁
・出詠　104名

・38頁
・出詠　103名

11月1日	第30巻11月号（通巻287号）上梓	◆286号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） 二十五首詠「四季の風みち」　黒羽　紘子 ウ九月号批評（作品Ⅰ）　伊藤　モト （作品Ⅱ）　末次　房江 ウ合　評　中村武光・鈴木熹子・加藤かず子・吉田昌夫
11月8日	本部歌会11月例会（第346回）	・40頁 ・出詠　107名
11月8日	渋谷支部歌会	
11月9日	水戸支部歌会	
11月14日	柏支部歌会	
11月15日	千葉支部歌会	
11月16日	水戸支部歌会	
11月23日	品川支部歌会	
11月29日	大田支部歌会	
12月1日	第30巻12月号（通巻288号）上梓	◆288号内容 ウわが愛する歌―名歌鑑賞―（277号～288号まで）　川村　貴美 巻頭言（277号～288号まで）　高崎　邦彦 ア阿部正路論（第75回～第86回）（277号～288まで）　須藤　宏明 ウ歌誌散見（第52回～第62）（12月289号まで）　豊泉　豪 ウ秀歌抜芳（第275回）（12月288号まで連載）　高崎　邦彦 ウ作歌の目作歌の技法（第36回～第47回）（12月288号まで）　三木　勝 エ歌帖余白（第49回～第60回）（277号～288号まで）　松岡　三夫 エ追悼　北林和子同人を悼んで　高崎　邦彦・奥田　清 ・二十五首詠「娘のくれし夢」　八代　陽子 エ十月号批評（作品Ⅰ）　伊藤　モト （作品Ⅱ）　末次　房江 ・座談会「新しい合評をめざして」 高崎邦彦・志賀倭子・庄司久恵・末次房江・北川昭・三木勝・ 山名恒子・松岡三夫・山田紀子 ・戸定が丘歴史公園吟行会・吟行会短歌一首 ・長歌特集 井上萬里子・河野静子・北川昭・久保田昭江・佐伯朋子・渡 辺幸子・山名恒子・酒向一次・志賀倭子・末次房江・高崎邦彦・ 玉川愛子・月田藤枝・土屋道子・中村陽子・松岡三夫・三木 勝	・50頁 ・出詠　107名
12月13日	本部歌会12月例会（第347回）	
12月13日	渋谷支部歌会	
12月14日	水戸支部歌会	
12月18日	品川支部歌会	
12月20日	千葉支部歌会	
12月21日	水戸支部歌会	

1月1日	第31巻1月号（通巻289号）上梓	◆289号内容 ・わが愛する歌―名歌鑑賞―（289号～300号まで） ・巻頭言（289号～300まで） ・二十五首詠「還暦日の朝」より ㋓年頭随想 ㋓年頭所感 ㋐阿部正路論（第87回）（289号～300まで） ㋒歌誌散見（第63回）（289号～300号まで） ㋓十一月号批評（作品Ⅰ） （作品Ⅱ） ㋒合評（匿名座談会） ㋒選者十首　岩橋千代子・武田節子・森本元昭・上田やい子 ㋒秀歌抜芳（第287号～296号）（289号～300号） ㋐文法講座　文語で短歌を詠む人のために（一）（289号～300号） ㋒作歌の目作歌の技法（第48回）（289号～300号まで） ㋓歌帖余白（第61回）（289号～300号） ・歓迎の歌仙　シーサイド短歌会	・創設者　阿部　正路 ・代表　髙﨑　邦彦 ・編集人　松岡　三夫 ・会計　北川　昭 ・上梓所　庄司　久恵 ・印刷所　三晃社 （それぞれ12月号300号まで変更なし） ・42頁 ・出詠　106名
1月10日	本部歌会新年会（第348回）	庄司　久恵 髙﨑　邦彦 髙﨑　邦彦 原田　寛 永谷　茂 須藤　宏明 豊泉　豪 原武　寿子 塚本　正子	
1月11日	水戸支部歌会		
1月15日	品川支部歌会		
1月16日	柏支部歌会		
1月18日	水戸支部歌会		
1月26日	大田支部歌会		
2月1日	第31巻2月号（通巻290号）上梓	◆290号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） ・二十五首詠「人生は旅」 ㋓十二月号批評（作品Ⅰ） （作品Ⅱ） ㋒合評（匿名座談会） ㋒歌集『風待ちて翼は』書評特集 髙﨑邦彦・三木勝・川村貴美・佐伯朋子・庄司久恵・末次房江・谷河ひさ・照山好子・冨永道子・原田寛・深谷幸子・山田田鶴子・渡辺幸子・松岡三夫 ㋓会員サロン「金魚のごと」 ・太陽の舟短歌会　平成20年度会計報告	・50頁 ・出詠　110名
2月14日	本部歌会2月例会（第349回）	渥美　崇子 原武　寿子 塚本　正子 冨永　道子 北川　昭	
2月8日	水戸支部歌会		
2月14日	渋谷支部歌会		
2月15日	水戸支部歌会		
2月19日	品川支部歌会		
2月20日	柏支部歌会		
2月21日	千葉支部歌会		
2月23日	大田支部歌会		

3月1日	第31巻3月号（通巻291号）上梓		
3月14日	本部歌会3月例会（第350回）		
3月8日	水戸支部歌会		
3月13日	柏支部歌会		
3月15日	水戸支部歌会		
3月21日	千葉支部歌会		
3月23日	大田支部歌会		
3月30日	洗足池畔吟行会（大田支部担当） 特　選　庄司　久恵 準 特 選　久保田昭江 最高得点　吉岡悠紀子	◆291号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） ・二十五首詠「残り世を生く」　月田　藤枝 ㋓一月号批評（作品Ⅰ）　原武　寿子 （作品Ⅱ）　塚本　正子 ㋒合評（匿名座談会） ㋔エッセイ「歌との出会い」　石塚　立子 ㋕会員サロン　歌会に出席して　豊島　英明 ・角川書店刊総合短歌誌『短歌』の「全国歌誌展望」（黒木三千代）に『太陽の舟』（三月号）がとりあげられる。	・42頁 ・出詠 106名
4月1日	第31巻4月号（通巻292号）上梓		
4月11日	本部歌会4月例会（第351回）		
4月11日	渋谷支部歌会		
4月12日	水戸支部歌会		
4月15日	水戸支部歌会		
4月17日	柏支部歌会		
4月18日	千葉支部歌会		
4月27日	大田支部歌会	◆292号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） ・二十五首詠「斎王物語」　山田田鶴子 ㋒二月号批評（作品Ⅰ）　宮井　富美 （作品Ⅱ）　森田　勝昭 ㋒合評（匿名座談会） ●全国大会案内・左千夫のふるさと　原田　寛	・42頁 ・出詠 110名
5月1日	第31巻5月号（通巻293号）上梓		
5月9日	本部歌会5月例会（第352回）		
5月9日	渋谷支部歌会		
5月10日	水戸支部歌会		
5月15日	柏支部歌会		
5月16日	千葉支部歌会		
5月17日	水戸支部歌会	◆293号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） ・二十五首詠「日々是好日」　江面　伸子 ㋒三月号批評（作品Ⅰ）　宮井　富美 （作品Ⅱ）　森田　勝昭 ㋒合評（匿名座談会） ・洗足池畔吟行会報告（出席28名）　庄司　久恵 ・吟行詠草	・42頁 ・出詠 109名
5月17日～5月18日	岐阜支部吟行歌会		
5月21日	品川支部歌会		
5月25日	大田支部歌会		

6月1日	第31巻6月号（通巻294号）上梓	◆294号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） ・二十五首詠「大磯の春夏秋冬」　杉山　直子 ㋒四月号批評（作品Ⅰ）　月田　藤枝 （作品Ⅱ）　森田　勝昭 ㋓合評（匿名座談会） ㋔会員サロン「ローズマリー」　石塚　立子 ●長歌特集 石塚立子・奥田清・北川昭・酒向一次・玉川愛子・月田藤枝・松岡三夫・三木勝・渡辺幸子 ●第十一回太陽の舟全国大会詠草67首　於　外房一宮館	・46頁 ・出詠　109名
6月8日	大田支部歌会		
6月14日	水戸支部歌会		
6月19日	柏支部歌会		
6月21日	水戸支部歌会		
7月1日	第31巻7月号（通巻295号）上梓	◆294号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） ・二十五首詠「大磯の春夏秋冬」　杉山　直子 ㋒五月号批評（作品Ⅰ）　佐伯　朋子 （作品Ⅱ）　多久和玲子 ㋓合評（匿名座談会） ・雑誌『短歌（角川書店）』、六月号に掲載された『太陽の舟』の紹介文	・42頁 ・出詠者　111名
7月11日	本部歌会7月例会（第354回）		
7月11日	渋谷支部歌会		
7月12日	水戸支部歌会		
7月16日	品川支部歌会		
7月17日	柏支部歌会		
7月18日	千葉支部歌会		
7月19日	水戸支部歌会		
7月27日	大田支部歌会		
8月1日	第31巻8月号（通巻296号）上梓	◆296号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） ・二十五首詠「秋景」　松木　昭子 ㋒六月号批評（作品Ⅰ）　佐伯　朋子 （作品Ⅱ）　多久和玲子 ㋓ウ合評（匿名座談会） ●第十一回太陽の舟全国大会報告　原田　寛 ・入賞者十首詠 太陽の舟賞　石塚　立子 功労賞　山名　恒子 特別賞　長沼　温代・松本　啓子・山田田鶴子 努力賞　岩橋千代子・伊藤モト・小林絢子 新人賞　富原　澄枝	・50頁 ・出詠者　106名 ・全国大会題詠「海・波・砂」出詠　46名
8月8日	本部歌会8月例会（第354回）		
8月8日	渋谷支部歌会		
8月16日	水戸支部歌会		
8月20日	品川支部歌会		
8月22日	千葉支部歌会		
8月24日	大田支部歌会		

9月1日	第31巻9月号（通巻297号）上梓	代表者賞　土方　澄江 東京文芸館賞　武田　節子 高得点賞 第一位　黒羽　紘子 第二位　鈴木　熹子 第三位　原武　寿子	
9月12日	本部歌会9月例会（第355回）	◆297号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略） ・二十五首詠「ふたたびの旅」　玉川　愛子 ㋮七月号批評（作品Ⅰ）　佐伯　朋子 （作品Ⅱ）　多久和玲子	・40頁 ・出詠者　106名
9月10日	月の船支部歌会		
9月12日	渋谷支部歌会		
9月12日	水戸支部歌会	㋮合評（匿名座談会）	
9月18日	柏支部歌会	・会員サロン「無欲」　玉川　愛子	
9月19日	千葉支部歌会		
9月20日	水戸支部歌会		
10月1日	第31巻10月号（通巻298号）上梓	◆298号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略）	
10月10日	本部歌会10月例会（356回）	・二十五首詠「夏寒く」　中村　陽子 ㋮八月号批評（作品Ⅰ）　山名　恒子	・42頁 ・出詠者　110名
10月10日	渋谷支部歌会	（作品Ⅱ）　岡部千代松	
10月16日	品川支部歌会		
10月17日	柏支部歌会	㋮合評（匿名座談会）	
10月18日	千葉支部歌会	・連歌　秋・限りなき空　シーサイド短歌会	
10月26日	水戸支部歌会		
10月25日	大田支部歌会	・高山吟行会案内	
～			
10月26日	岐阜支部吟行歌会		
11月1日	第31巻11月号（通巻299号）上梓	◆299号内容（同一執筆者による同一タイトルの年間連載は省略）	
11月14日	本部歌会11月例会（357回）	・二十五首詠「秋思」　木村百合子 ㋮九月号批評（作品Ⅰ）　山名　恒子	・40頁 ・出詠者
11月8日	水戸支部歌会	（作品Ⅱ）　岡部千代松	
11月9日	大田支部歌会		
11月11日	月の舟支部歌会	㋮合評（匿名座談会）	
11月14日	水戸支部歌会		

11月14日	渋谷支部歌会	㋕追悼　金子泰太郎さんを偲ぶ	土屋　道子
11月20日	柏支部歌会	二〇〇九年九月十三日午前九時塩見岳	吉田　昌夫
11月21日	千葉支部歌会	㋖会員サロン「城のある町」	山田田鶴子
12月1日	第31巻12月号（通巻300号）上梓	◆300号内容	
12月12日	本部歌会12月例会（358回）	・我が愛する名歌鑑賞（289号〜300号）	庄司　久恵
12月12日	渋谷支部歌会	・巻頭言　三百号に寄せて	髙﨑　邦彦
12月13日	水戸支部歌会	・二十五首詠「縣居の杜」	三木　勝
12月14日	大田支部歌会	㋐阿部正路論（第九十八回）（289号〜300号）	須藤　宏明
12月18日	柏支部歌会	㋒歌誌散見（289号〜300号）	豊泉　豪
12月19日	千葉支部歌会	㋒十月号批評（作品Ⅰ）	山名　恒子
		（作品Ⅱ）	岡部千代松
		㋒合評（匿名座談会）	
		㋒選者十首　岩橋千代子・武田節子・森本元昭・上田やい子	
		㋒秀歌抜芳（289号）	髙﨑　邦彦
		・長歌特集　五人集	北川昭・末次房江・角田順子
			松岡三夫・三木勝
		・文法講座・文語で短歌を詠む人のために（一二）	奥田　清
		・歌帖余白（七二）編集雑記（289号〜300号）	松岡　三夫
		・作歌の目・作歌の作法（289号〜300号）	三木　勝
		・歌会報告	
		・創立30周年三〇〇号記念　平成二十二年新年会案内	
		・平成二十二年太陽の舟執筆者年間計画併せて原稿依頼	
		・特集三〇〇号に寄せて	

・84頁
・出詠者　109名